

2022年度 教師国内研修報告書

目 次

フィールドワークで印象に残った1枚の写真集

I. 教師国内研修の概要 -----	1
1 ● 目的とミッション	
2 ● 研修の日程および内容	
3 ● フィールドワークの日程・訪問先・内容	
4 ● 研修の受講者	
II. フィールドワーク前後の国内研修 -----	5
5 ● 事前研修	
9 ● 事後研修①	
III. フィールドワークの様子と受講者の学び -----	12
12 ● 7月26日(火) スケジュール	
13 ● ① NPO 法人アジア車いす交流センター (WAFCA) /インドネシア	
14 ● ② JICA エジプト	
15 ● 7月27日(水) スケジュール	
16 ● ③ NPO 法人学び舎つばさ/ベトナム	
17 ● 8月3日(水) スケジュール	
18 ● ④ NPO 法人コーヒー生産地と協働する会/ルワンダ	
19 ● ⑤ JICA セネガル	
20 ● ⑥ JICA ルワンダ	
21 ● 8月4日(木) スケジュール	
22 ● ⑦ NPO 法人アイキャン/フィリピン	
23 ● 8月7日(日) スケジュール	
24 ● ⑧-1 NPO 法人 DIFAR/森の音楽祭	
25 ● 8月23日(水) スケジュール	
26 ● ⑧-2 NPO 法人 DIFAR/ボリビア	
27 ● ⑨ JICA ラオス	
29 ● 8月24日(木) スケジュール	
IV. フィールドワーク後の報告 -----	30
30 ● フィールドワーク研修報告書	
30 ● 1. フィールドワークに対する各自の目的とその達成度	
33 ● 2. 柱1「世界(訪問国・その国の人々)と肯定的に出会う」観点から学んだこと	
36 ● 3. 柱2「日本と世界の同一性に気づき、つながりを理解する」観点から学んだこと	

- 39 ● 4. 柱3「世界の課題を知り、解決に向けて共に越える」観点から学んだこと
- 42 ● 5. その他全般を通じての感想・意見など
- 46 ● 中間会合
- 46 ● 事後研修②
- 47 ● 実践報告フォーラムでの報告

V. 実践報告書 ----- 48

- 48 ● 実践報告書の内容一覧
- 49 ● 伊藤彰：Stop Poverty ～貧困をなくそう～
- 54 ● 伊藤聡子：あなたの幸せはわたしの幸せ～ふだんの 暮らしの しあわせ～
- 61 ● 伊藤知世：わたしたちみんな地球人
- 66 ● 菊地純奈：もしかしたら、この生ごみは〇〇かもしれない？！
- 71 ● 高口涼：国旗 & 食べ物 de 国際理解
- 76 ● 児玉やこ：世界の仲間と笑顔に～みんな幸せ、だから幸せ～
- 82 ● 澤田直美：食でつながる世界と日本
- 87 ● 地頭綾香：Well-being な社会を実現するために～貧困を事例として～
- 93 ● 諏訪部景子：誰もが夢をつかめる世の中に
- 98 ● 森谷朋香：取り組もう！ゴミミッション！！
- 102 ● 山本実穂：教室ダイバーシティ ～ともに暮らす～
- 107 ● 遠山桂吾：SDGs で世界を見てみよう

VI. 研修全体のふりかえり・評価 ----- 112

- 112 ● 研修への期待と満足度について
- 113 ● 研修を受けた自分自身の意識の変化について
- 113 ● 開発教育・国際理解教育の実践について
- 115 ● 学習者の変化や周りへの波及効果について
- 117 ● 全体を通して

フィールドワークで印象に残った1枚の写真集 1/2

● 伊藤 彰



「みんな、何してるの？」

森の音楽祭を主催する DIFAR の思いがふと表れた一枚。主役の一人である子どもが見知らぬ大人たちにも物怖じせず輪の中に溶け込む姿が、一見非日常の中に日常を感じられ思わず微笑んでしまう。

● 伊藤 知世



「WA になって踊ろう！」

子どもも大人も国籍も関係なくみんなで輪になって手をつないで踊る。まさしく国際交流だと思った。大人が全力で楽しむ姿を子どもに見せること、これも大切なことだ。

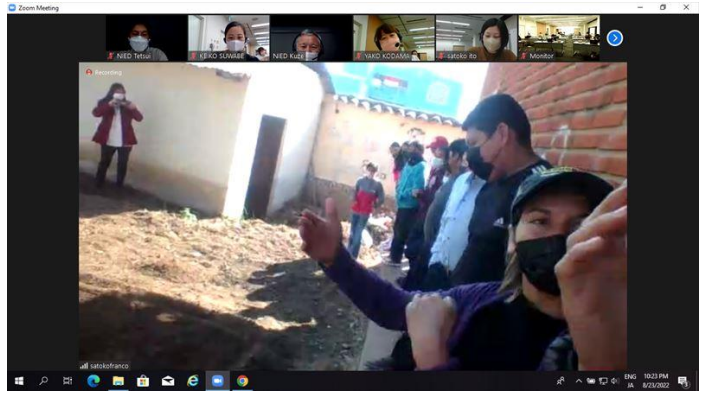
● 伊藤 聡子



「ねえ聞いて！ 堆肥作りのこと」

学校での堆肥作りについて熱心に紹介してくれたボリビアの子どもたち。環境教育を受けたことで、ゴミに対する考え方が変わった。こんな子どもたちから環境に関する取組が広がるといいな。

● 菊地 純奈



「意気揚々と話す現地の人」

DIFAR のスタッフが想像していた以上の畑づくり、これからの種まきや作物の生長に思いを馳せている現地の人々の姿が印象的だった。

● 高口 涼



「エジプト愛を語る人」

JICA エジプトとのオンラインを前に派遣をきっかけにエジプトについて詳しくなった人から話を聞く。夜遅い時間のオンラインにもかかわらず興味に突き動かされる行動力、関心を持ち続けることの大切さを、身をもって知った。こういう生涯にわたって自分で学び続ける人を教師として育てなければならぬと思った。

● 遠山 桂吾



「みんなで踊る様子」

国籍や性別、年齢に関係なくみんなで手を取って踊ったりする場面が見られた。多文化共生を体感することができた。社会のあるべき姿を見たような気がした。

フィールドワークで印象に残った1枚の写真集 2/2

● 児玉 やこ



「キョリを超えてつながる想い」

「笑顔で手を振ったら、笑顔で振り返ってくれる」地球の反対側の子どもたちとつながって心が温かくなりました。彼らのコンポスの取組を聞いて、決意。ペラダコンポスト始めました。さて、堆肥で何を育てよう。

● 地頭 綾香



「楽しみながら『自分ごと化』」

ボリビアの小学6年生の児童たちによるコンポストプロジェクト成果発表会と質疑応答の様子。自分の言葉で、意識や行動の変化について楽しそうに、そして堂々と話す姿が印象的だった。

● 澤田 直美



「前に進んでいる子どもたち」

親に捨てられるという辛い経験をした子どもたちが、安心してできる環境に住めるようになり、明るく生活していた。笑顔がとても印象的だった。

● 諏訪部 景子



「美杉の森に響け ふるさとのうた」

ふるさとのアフリカの音楽でたくさんの人を喜ばせた素敵な家族。人種を越えたあたたかい出会いに感動した。手拍子や楽器の音色も加わり、音楽祭の会場の空気が一つになった瞬間だった。

● 森本 朋香



「みんなでLet's ダンス!!」

森の音楽祭。大人も子どもも、国籍も男女も関係なく一緒にダンスして盛り上がり、幸せな時間でした。音楽やダンスで世界がつながるって素敵!!

● 山本 実穂



「音楽でつながる」

森の音楽祭のフィナーレで、大人も子供も国籍も関係なく、楽しそうに踊る姿が印象に残った。日本の森の中で、他国の音楽の良さが人と人を繋いでいた。まさに「世界と肯定的に出会うこと」であると感じた。

I. 教師国内研修の概要

● 目的・ミッション

(1) 目的

「持続可能な社会の創り手の育成」への貢献をねらいとし、次の2点を本研修の目的とした。

- ① 開発教育・国際理解教育の実践と裾野拡大に貢献する意欲のある教員が、開発途上国への国際協力の経験を活かし、日本国内の課題に取り組んでいる団体への訪問を通し、国際協力への理解を基に、世界や日本国内の現状・課題を理解すること。事前・事後の研修を通し、活動地域の現状、関連性、団体の取り組みなどから、課題解決のために必要な事を考える。さらには、開発教育・国際理解教育の意義について理解を深めること。
- ② 参加者が、研修成果を活かした学校での授業実践を通じ、「持続可能な社会の創り手」としての児童・生徒の育成を行うこと。また、汎用性のある学習指導案の作成などの取り組みを通じて他の教員等と共に開発教育・国際理解教育の普及に寄与すること。

(2) 受講者が設定した「わたしたちのミッション」

本研修の上記の目的を踏まえ、国際協力団体のフィールドワークおよび国内研修の全体のミッションを、受講者同士で次のとおり設定し、実施した。

<知る・考える>

- ①今を知る。
- ②現地の実際やそこで働く人の思いや活動を知る。
- ③世界を身近に感じて自分事に！
- ④世界をよりよくする工夫を考える。

<実践する・育てる>

- ⑤教材をたくさん集めて活用し、実践する。
- ⑥ちがいや多様性に気付き、互いを尊重できる人材を育てる。

<伝える・つながる>

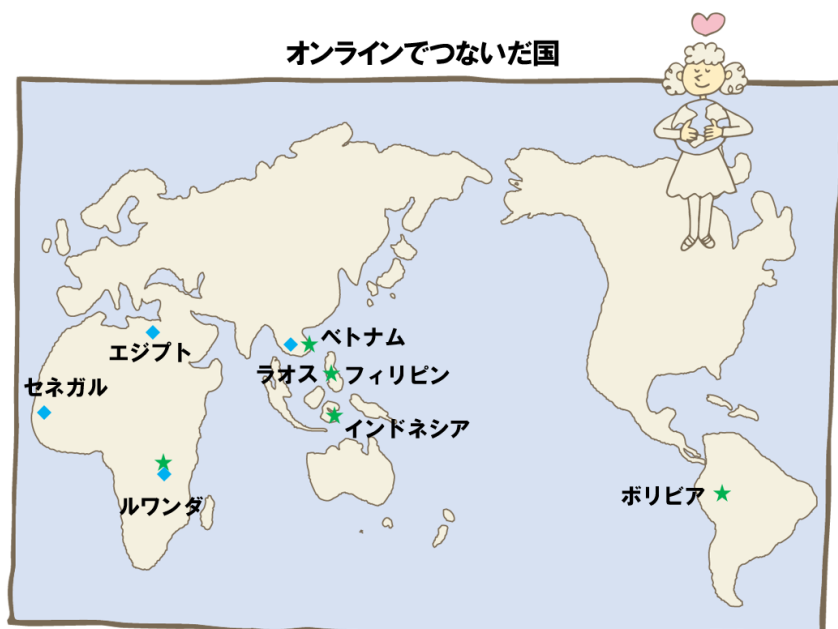
- ⑦たくさんの人に伝える。
- ⑧子ども、保護者、同僚、地域、参加者に学びを伝える。
- ⑨ネットワークをつくる。
- ⑩仲間や現地とのつながりを継続し、ネットワークをより広げていく。
- ⑪自分も周りも笑顔に☺

● 研修の日程および内容

各国内研修およびフィールドワークの日程および内容は、下表のとおり実施した。

回	日時	内容（予定）
事前研修	7月2日（土）13：00～17：00 7月3日（日）10：00～15：00	<ul style="list-style-type: none"> ●本研修の概要、訪問先の説明 ●国際協力や参加型学習に関する基礎の確認 ●研修目標の共有、情報収集・交流の準備、役割分担
フィールドワーク 国内訪問& 海外オンライン	7月26日（火）11：00～20：30 7月27日（水）10：00～15：00 8月3日（水）15：00～22：30 8月4日（木）10：30～15：00 8月7日（日）11：00～15：00 8月23日（火）14：00～24：00 8月24日（水）10：30～12：00	<ul style="list-style-type: none"> ●東海地方の国際協力 NGO 等の国内活動視察 ●上記 NGO の海外・国内活動現場のオンライン視察 ●NGO や JICA 関係の外国人との交流 ●フィールドワークのふり返り ●受講者同士の学び合い
事後研修① (授業実践前)	9月10日（土）13：00～17：00 9月11日（日）10：00～15：00	<ul style="list-style-type: none"> ●現地研修の気づきや素材の教材化 ●上記教材を使った学習者主体の授業案の作成
<p>9月～2月：各自、学校の授業などで実践！</p> <p>11月26日（土）、1月21日（土）13：00～17：00（自由参加・有志） フォーラムでのワークショップ提供の準備、個人の実践の相談</p>		
事後研修② (授業実践後)	2月25日（土）10：00～18：00	<ul style="list-style-type: none"> ●実践の内容、成果と課題の共有 ●フォーラムでの報告の準備
実践報告 フォーラム	2月26日（日）10：00～16：30	<ul style="list-style-type: none"> ●実践の報告（ポスターセッション） ●有志チームによる開発教育体験ワークショップ ●フィールドワーク報告

※事後研修②と実践報告フォーラムは、開発教育指導者研修（実践編）受講者と合同で実施



● フィールドワークの日程・訪問先・内容

4回に分けて、フィールドワークを下表のとおり実施した。

回	月日	国名	団体名	時間・内容
1	7/26 (火)	インドネシア	①NPO法人 アジア車いす 交流センター (WAFCA)	刈谷市駅10:30集合 11:00- @WAFCA刈谷事務所で活動説明 12:00- 事務所スタッフとランチ交流 13:00-14:00 現地オンライン【障がい者支援】 …挨拶、授業見学、スタッフ・車いす利用者インタビュー、 校内見学(トイレなど)、感想発表、集合写真 14:00-15:00 国内事業 車いす病院視察
		エジプト	②JICAエジプト	19:00-20:30 @JICA中部→現地オンライン【教育支援】 …EJSプロジェクト(特別活動を中心とした全人的な教育導入)
	7/27 (水)	ベトナム	③NPO法人 学び舎つばさ	10:00-13:00 @JICA中部から現地オンライン【自立・夢支援】 …団体活動紹介、授業風景見学、教員・生徒/日本留学生 と相互交流、感想共有、スタッフ滞在記、質疑応答
		—	NIED (ワークショップ)	14:00-15:00 @JICA中部で1回目フィールドワークの振り返り等
2	8/3 (水)	ルワンダ	④NPO法人 コーヒー生産地 と協働する会	15:00- @JICA中部で活動紹介 16:00-17:30 現地オンライン【農業支援】 …現地生産現場見学、生産者インタビュー
		セネガル	⑤JICAセネガル	18:00-19:00 @JICA中部→現地オンライン【看護・助産師支援】 …挨拶セネガル紹介、プロジェクト紹介、セネガル人スタッフ からの活動紹介、質疑応答
		ルワンダ	⑥JICALルワンダ	21:00-22:30 @JICA中部から現地オンライン【教育支援】 …プロジェクト専門家、教育省役人からの説明と意見交換、 学校配属の隊員6人(3グループ)との意見交換、感想共有
	8/4 (木)	フィリピン	⑦NPO法人 アイキャン	10:30- @アイキャン事務所で活動紹介 11:00-12:00 現地オンライン【子ども支援】 …子どもの家見学、子ども・スタッフとの交流
		—	NIED (ワークショップ)	14:00-15:00 @JICA中部で2回目フィールドワークの振り返り
3	8/7 (日)	ボリビア (日本)	⑧-1 NPO法人 DIFAR	名古屋駅8:15→伊勢竹原駅10:34 DIFAR送迎 11:00-15:00 森の音楽祭@津市美杉町【異文化理解】 …祭体験、DIFAR事務局長と対話 伊勢竹原15:35→名古屋駅18:07
4	8/23 (火)	ラオス	⑨JICALラオス	14:00-16:00 @JICA中部から現地オンライン【教育支援】 …ラオスの教育紹介(専門家)、教育実践紹介(協力隊2名) 質疑応答(2グループ)、全体で意見交換
		ボリビア	⑧-2 NPO法人 DIFAR	21:30-24:00 @ JICA中部から現地オンライン【環境教育支援】 …DIFARの全体活動紹介(代表) …小学校コンポストプロジェクト成果発表会、質疑交流 …小学4年生自然環境プログラム紹介、質疑交流
	8/24 (水)	—	NIED (ワークショップ)	10:30-12:00 @JICA中部で3, 4回目フィールドワーク振り返り等

● 研修の受講者

(1) 対象

国公立・私立の小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、高等専門学校の教員（研修後、継続的に児童・生徒への開発教育/国際理解教育を実践できる立場にある教員）

また本研修の目的を踏まえ、以下の条件をいずれかでも満たしている教員を推奨する。

- ・ JICA が実施する各種研修への参加経験を有する教員または当該年度参加予定のある教員
- ・ 既に開発教育/国際理解教育の授業実践経験を持つ教員
- ・ 教務主任や各種研究会への所属者など、本研修の成果を広く他の教員にも共有できる立場にある教員

(2) 受講者

選考の結果、受講した者は、以下のとおりである。

教師国内研修受講者

No.	名前	所属先・教科・学年	県
1	伊藤彰	黄柳野高等学校 英語・高1	愛知
2	伊藤聡子	蟹江町立蟹江小学校 全教科・小5	愛知
3	伊藤知世	桑名市立日進小学校 国語、社会、総合、体育、道徳、図工・小5	三重
4	菊地純奈	名古屋市立平田小学校 全教科・小3	愛知
5	高口涼	富士市立広見小学校 全教科・小2	静岡
6	児玉やこ	弥富市立弥富北中学校 美術、国語、特別支援・教務主任	愛知
7	澤田直美	愛知県立豊田高等学校 英語・高2	愛知
8	地頭綾香	金城学院高等学校 国語、総合・高1	愛知
9	諏訪部景子	春日井市立北城小学校 社会、総合・小5	愛知
10	森谷朋香	名古屋市立東海小学校 全教科・小5	愛知
11	山本実穂	可児市立広見小学校 全教科・小5	岐阜
12	遠山桂吾	JICA中部 現職インターン 一宮市立赤見小学校教諭	愛知

II. フィールドワーク前後の国内研修

● 事前研修

7月2日(土)13:00~17:10、3日(日)10:00~15:10

<ねらい>

- ① 研修の目的・内容・スケジュールを理解し、学び合う仲間と共に「私たちのミッション」を確認する。
- ② 開発教育・国際理解教育の学びの柱と内容を理解し、教育実践のイメージを持つ。
- ③ 訪問する団体や活動に関する情報を共有する。
- ④ 研修を通して学んだことを教材化して授業実践につなぐため、視察ではどのような情報(教材化の素材)を収集してくる必要があるかを考える。

<プログラム>

■ 1日目：7月2日(土)

時刻	内容	講師等
13:00 (5分)	1. 開会 (1) 主催者あいさつ (2) スタッフ、同行者の紹介	JICA 秋山
13:05 (10分)	2. 教師国内研修と事前研修の目的・内容 (1) 研修の全体概要と受講者への期待 (2) 事前研修の目的の確認	NIED 川合 伊沢
13:15 (65分)	3. 共通基盤づくり (1) アイスブレイキング ~お互いのことを知り合おう~ (2) 私たちのミッションメイキング	NIED 伊沢
14:20 (40分)	4. 学習者の学びの柱に沿ったアクティビティ体験 (1) 学習者の学びの柱の確認 (2) 「フレンドシップ教材」と使った教材化と実践のイメージづくり ① 第1章…「なりきり自国の観光大使」と「肯定的に出会う」ポイント	NIED 伊沢
15:00	休憩 (10分)	
15:10 (65分)	② 第2章…「〇〇国と日本とのつながりや同一性」 ③ 第3章…「〇〇国の課題&解決に向けての取り組み」+参加型ポイント	NIED 伊沢
16:15 (40分)	5. 問題解決=問題の背景・原因にアプローチする (1) 貧困とは何か? <派生図> (2) 貧困の悪循環 <シミュレーション> (3) 貧困の悪循環を断つために必要なこと・役立つもの<プレスト> (4) SDGs との関連<マッチング>	NIED 伊沢
16:55 (5分)	6. 1日目のふりかえり	NIED 伊沢
17:00 (10分)	7. 事務連絡など	JICA 秋山 NIED 川合

■2日目：7月3日（日）

時刻	内容	講師等
10:00 (10分)	1. アイスブレイキング	NIED 久世
10:10 (5分)	2. 事前研修ーフィールドワークー事後研修のパッケージ説明 ① 学習者に何を学んでもらうかのプログラムを事後研修で作るために ② フィールドワーク等でそのための教材を収集する ③ 事前研修では「どんな教材を集めたいか」を考える	NIED 久世
10:15 (85分)	3. 訪問先はこんなところ・こういう人々！ (1) フィールドワークのスケジュールと各訪問先の共有 (2) 訪問先の分担決め (3) 調べ学習 (4) プレゼン発表+調べたいこと・聞きたいことメモ	NIED 鉄井 NIED 久世
11:45	お昼休憩 (60分)	
12:45 (35分)	(続き)	NIED 久世
13:20 (75分)	4. フィールドワークを授業につなげるための計画/チーム作業 (1) 訪問先ごとに「〇〇のために、△△を集める・聞く」の洗い出し (2) アイデアの付け足し (3) 知りたい/教材化したい/子どもたちと考えたい重点項目決め (4) 集め方・聞き方 (具体的質問内容) の検討 (5) 全体共有、事前送付質問内容の精査・決定 (6) 当日に向けたチームでの最終準備・確認	NIED 久世 受講者フォロー (鉄井、伊沢、川合)
14:35 (15分)	5. 訪問先団体とのコミュニケーション (1) あいさつの内容、あいさつする人 (2) 謝金以外のお礼の表明方法について	NIED 久世
14:50 (5分)	6. 第1回フィールドワークの確認 (1) 集合場所、解散場所 (2) 持ち物など	NIED 鉄井
14:55 (15分)	7. 最終質疑応答、事務連絡	NIED 川合 JICA 江口



<成果例>

★ 訪問国と日本とのつながりや同一性

訪問国	つながり	共通点・同一性
ボツワナ	ブロンズ河観(物産品を売っている様子) 日本産品が売れている。	1. 日本車(中古) 3 カラオケ 左ハンドル 2. マニマニ(スワヒリ語)
インドネシア	インドネシアから米を輸入	1. おみやげ 4 ショウワ 2. スクール 5. 火山国 3. 納豆 6. シヤオモ(子供)
ベトナム	戦争で攻められた 日本が援助で独立 日本食が入る	1. 米を食べる 2. めん 3. 帯(服がある(赤いスカート))
ルワンダ	ルワンダ日本銀行に日本人がいた	1. 人口密度が高い 2. Tシャツがある 3. 石油資源なし 4. インターネット環境

国名	つながり	共通点・同一性
ラオス	十二支	米料理 お祭り(お正月・ポロト・ラングスト・ダンス) フン(しゃぶしゃぶ)
セネガル	から子 道場 100以上 料理の技術 洗剤の技術	非向 30年以上 お茶 車のレース 医療技術 都市部の子ども お祭り(お正月・ポロト・ラングスト・ダンス) フン(しゃぶしゃぶ)
マリビ	日本人町 室町時代から 同様に儲けたい	母牛 女性の社会進出 地域格差
エジプト	江戸末期 福沢諭吉ら使節団 オリンピック 日本人選手との対決	香道 - 職人としての誇り(コラシエ等) (七草ではなく竹の葉を巻いて)

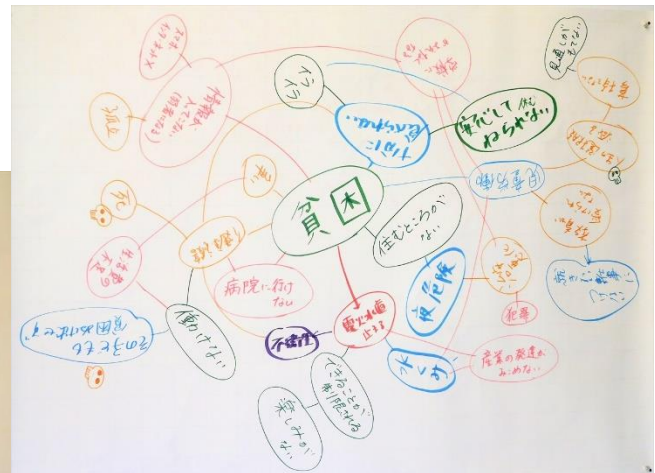
★ 訪問国の課題&解決に向けての取り組み

訪問国	課題	取り組み	手法
ルワンダ	ルワンダ内戦(顔見知りの人たちで...)	芝生に座る裁判 家づくりプロジェクト(環境の人が通す) 平和バスケ(話の道具)	対比表 ロールプレイ
ボリビア	児童労働 鉱山・セロウキカ	政府に対する報告 アプローチ	派生図 対比表
インドネシア	自然災害 津波 生物多様性 初音	防災教育 動物(木) 足3. 認証工場の発展	優先順位付け TJ法
エジプト	ジェンダー差別偏見	話し合い 解決へ	二軸法 TJ法

国	課題	取り組み	手法
ラオス	①教育格差(男女) ②不妊薬 地雷 (メダシ野郎、メダシ)	① X ② 日本地雷対策を理屈 支援する	① 両国対比 ② フォトストーリー(写真)
エジプト	①ジェンダーギャップ(男女) ②学校設備の不足 英語・フランス語の習得 ③水不足 地中の地下水	→ 違う人 働かせるのサポート 私立外国語スクールE → 高度な技術E	・TJ法 ・優先順位
セネガル	・貧しい → 食糧不足 政府の腐敗野郎 民営化 経済改善		・ランキング 比較 ・フン(しゃぶしゃぶ?) ・病室(しゃぶしゃぶ?)
マリビ	①ハチ農園へ入るお金 (健康保険...) ②日本在野のメダシ	→ ① X → ② Δ	① ハチ農園の現状(しゃぶしゃぶ) ② 支援(しゃぶしゃぶ) アプローチ ③ 支援(しゃぶしゃぶ) ④ 支援(しゃぶしゃぶ) ⑤ 支援(しゃぶしゃぶ)

★ 貧困とは何か? <派生図> →

★ 貧困の悪循環を断つために+SDGsとの関連



★ 訪問先ごとの調べ学習の結果、素材集めの詳細検討結果の例

③ NPO法人「学び舎つばさ」

◎ 援助のあり方と成果を知るために...

- 日本語を学ぶことでどんな仕事につくことができ、賃金はどのくらい上がるのか。(柱3)(柱2)
- 実際に、過去の生徒さんの進路はどのようなものがあったか。(柱3)
- 日本語を武器に自立した生活ができるようになるにはどのくらいの語学力が必要なのか。(柱2)

◎ 現地の人の反応を知るために...

- 心のかけ橋プロジェクトで特に子どもたちが喜んだ活動は何か。(柱1)
- 生徒さんは、日本に対してどのような印象を持っているのか。(柱1)(柱2)

◎ 女性の仕事づくりについての課題を考えるために

- 女性の働き口の現状と困難さはどのようなものか。(柱3)
- どんな支援を行っているか、女性へのサポートで大切にしている方針は何か。(柱3)

◎ 同じ教育者として共に考えるために...

- 「自調自考」の理念を達成するために、行っている具体的な手立てや声かけをきく。

7/27(水)		③ NPO法人学び舎つばさ／ベトナム	
訪問国	共通点	◇米を食べる ◇めん ◇制服がある(赤い負カーフ)	
	つながり	◇戦争で攻めた ◇ハノイ・ホーチミンに日本人が住んでいる ◇日本の援助で独立 ◇日本食が人気	
活動の3つポイント			ベトナム・カンボジアの人たちが日本語を学ぶことで夢を叶えたり、自立した生活がすすめるように支援 1. 先生も生徒も共に学び合う「自調自考」 2. 仕事づくりプロジェクト 3. 心のかけ橋プロジェクト

事前研修で、見聞きたいと考えたこと		けいごさん、みほちゃん、やこさん
優先順位が高い項目	<input type="checkbox"/>	現地の人の反応を知るために、心のかけ橋プロジェクトで特に子どもたちが喜んだ活動は何か/生徒が日本に対してどのような印象を持っているのか聞く。(柱1・2)
	<input type="checkbox"/>	援助のあり方と成果を知るために、日本語を学ぶことでどんな仕事につくことができ、賃金はどのくらい上がるのか聞く。(柱2・3)
共通項目	<input type="checkbox"/>	「女性の仕事づくり」についての課題を考えるために、ベトナムの女性の働き口の現状と困難さは、どのようなものか聞く。(柱3)
	<input type="checkbox"/>	(団体/スタッフの方個人として) 活動を始めたきっかけや想いと、活動をして初めての想いの変化
	<input type="checkbox"/>	(日本人スタッフの方) 学生時代の学びでいきていると思うこと/学生時代に学んでおけばよかったと思うこと
その他	<input type="checkbox"/>	活動する上で、特に大切にしていること
	<input type="checkbox"/>	援助のあり方と成果を知るために、実際に過去の生徒の進路はどのようなものがあったか聞く。(柱3)
	<input type="checkbox"/>	援助のあり方と成果を知るために、日本語を武器に自立した生活ができるようになるには、どのくらいの語学力が必要なか聞く。(柱2)
	<input type="checkbox"/>	「女性の仕事づくり」についての課題を考えるために、どんな支援を行っているか、女性へのサポートで大切にしている方針は何か聞く。(柱3)
	<input type="checkbox"/>	同じ教育者として共に考えるために、「自調自考」の理念を達成するために、行っている具体的な手立てや声かけを聞く。

※ 柱1...肯定的に出会う、柱2...つながりと同一性の理解、柱3...課題解決とビジョン達成

⑨ JICAラオス

◎ ラオスの教育の現状を知るために

- なぜ中退が多いのか、行けぬ子への支援もきく。(柱3)
- 日本とのちがいを知らず、教育制度のちがい、教育に関わるお金についてきく。→他にちがいがあれば...
- JICAが入り、制度はどうか知すために、Before、after をきく(現場の声、子どもの受容)

◎ 協力隊の具体的な取組を知るために

- どんな教材、教具なのか? 活用方法をどう伝えているのかきく。(柱3)

◎ 現地の先生方へのサポート、授業改善の際気をつけていることをきく

- 活動の成果を知るために、現地の先生方や子どもたちの受容や声をきく、協力隊の方の手ごたえも。(柱2・3)

◎ ラオスと日本の同一性やちがいを知らず、活動時、うまくいった!!と思ったこと、ラオスに合わない、難しい!!と思ったことをきく

- 日本でのどんな経験が、いかされているか? また、今のラオスの経験が、日本でもいけると思うかきく。(柱2)

◎ ラオスを身近に感じるために

- ラオスの魅力を紹介してもらう。(柱1)

8/23(水)		⑨ JICAラオス (教育基盤強化プログラム)	
訪問国	共通点	◇米料理 ◇お祭り(お正月、ハレード、美人コンテスト、ダンス) ◇ブン(収穫祭)	
	つながり	◇十二支	
活動の3つポイント			1. 教育制度、システムの整備 2. 教員養成校で、教材・教具の活用、新教科書の教授方法の提案・サポート 3. 付属小学校で、主に算数の授業提案・改善・サポート

事前研修で、見聞きたいと考えたこと		けいごさん、みほちゃん、やこさん
優先順位が高い項目	<input type="checkbox"/>	ラオスを身近に感じるために、ラオスの魅力を紹介してもらう。(柱1)
	<input type="checkbox"/>	ラオスと日本の同一性やちがいを知らず、活動時にうまくいった!!と思ったこと、ラオスには合わない・難しい!!と思ったことを聞く。(柱2)
	<input type="checkbox"/>	活動の成果を知るために、現地の先生方や子どもたちの受容や声、協力隊の方の手ごたえを聞く。(柱2・3)
共通項目	<input type="checkbox"/>	海外協力隊の具体的な取組を知るために、どんな教材・教具なのか、またその活用方法をどう伝えているのか聞く。(柱3)
	<input type="checkbox"/>	ラオスの教育の現状を知るために、ラオス特有の事情やなぜ中退が多いのか、行けなくなる子への支援を聞く。(柱3)
	<input type="checkbox"/>	(団体/スタッフの方個人として) 活動を始めたきっかけや想いと、活動をして初めての想いの変化
その他	<input type="checkbox"/>	(日本人スタッフの方) 学生時代の学びでいきていると思うこと/学生時代に学んでおけばよかったと思うこと
	<input type="checkbox"/>	活動する上で、特に大切にしていること
	<input type="checkbox"/>	ラオスと日本の同一性やちがいを知らず、日本でのどんな経験がいかされているか、また今のラオスでの経験が日本でもいけると思うか聞く。(柱2)
	<input type="checkbox"/>	日本とのちがいを知らず、活動時、うまくいった!!と思ったこと、ラオスに合わない、難しい!!と思ったことをきく。(柱2)
	<input type="checkbox"/>	協力隊の具体的な取組を知るために、現地の先生方へのサポート・授業改善の際に気をつけていることを聞く。(柱2・3)
	<input type="checkbox"/>	JICAが入り制度がどう変化したか知るために、現場の声や子どもたちの受容について前後の変化を聞く。(柱3)

※ 柱1...肯定的に出会う、柱2...つながりと同一性の理解、柱3...課題解決とビジョン達成

● 事後研修① 9月10日(土)13:00~17:00、11日(日)10:00~15:30

<ねらい>

- ① 国内研修で集めた情報を使ったアクティビティのアイデアを共有する。
- ② 教師国内研修で学んだことをもとにした個人の実践アクティビティ・プログラムを作成し、評価指標の活用や相互提案などを通してより実践的な内容に深める。
- ③ 実践報告フォーラムでのワークショップ提供の準備を行う。

<プログラム>

■ 1日目：9月10日（土）

時刻	内容	講師等
13:00	1. あいさつと研修のねらい・スケジュールの確認 (5分)	JICA 江口、NIED 久世
13:05	2. アイスブレイキング「同じところとちがうところ」(15分)	NIED 久世
13:20	3. フィールドワークのふりかえり (15分) (1) フィールドワーク報告書「学びの3つの柱」の共有	NIED 久世
13:35	4. 収集した現地素材の共有と活用法のアイデア出し (30分) (1) 教師海外研修ガイドブック等の確認 (2) 現地素材を使ったアクティビティのアイデア出し→共有	NIED 久世
14:05	5. 実践プログラム作り①「ねらいの設定」(40分) (1) 対象、実践時間数の確認 (2) 子ども達と一緒に考えたいこと連想図 (3) 「知る・気づく／考える・行動する」対比表 (4) プログラムのねらいの設定	NIED 久世 個別相談：鉄井、伊沢
14:45	6. 実践プログラム作り②「プログラム素案の作成」(40分) (1) プログラム全体の展開（四行詩、起承転結等）の作成 (2) プログラムの流れの作成 (3) 主アクティビティにおける発問、現地素材の記述	NIED 久世 個別相談：鉄井、伊沢
15:40	休憩 (10分)	
15:50	7. 実践プログラム素案の自己点検評価 (10分) (1) 6つの指標を使った点検評価	NIED 久世
16:10	8. 実践プログラム素案の小グループ相談会 (45分) (1) 3人グループで各実践プログラム素案の相互紹介、相談 (1人につき紹介5分+相談10分)	NIED 久世
16:30	9. 実践プログラム作り③「プログラム案のまとめ」(20分) (1) プログラム案をまとめ、A3用紙から模造紙へ	NIED 久世 個別相談：鉄井、伊沢
16:55	10. 事務連絡 (10分) (1) フィールドワーク関連（写真・動画共有、報告書） (2) 実践報告関連（フォーラム、実践報告書） (3) 精算関連（立替精算の振込先銀行口座、お土産代） (4) その他	NIED 川合

■ 2日目：9月11日（日）

時刻	内容	講師等
10:00	1. アイスブレイキング (10分)	NIED 久世
10:10	2. 実践プログラム作り③「プログラム案のまとめ」(50分) (1) 1日目の続きをまとめあげる	NIED 久世 個別相談：鉄井、伊沢
11:10	3. 実践プログラムの発表&提案会① (45分) (1) 発表者：プレゼンテーション×4人 (6分) (2) 聞き手：よかった点/よりよくするための提案×4人 (4分)	NIED 久世、鉄井
12:00	休憩 (60分)	
13:00	4. 実践プログラムの発表&提案会② (20分) (1) 発表者：プレゼンテーション×2人 (6分) (2) 聞き手：よかった点/よりよくするための提案×2人 (4分)	NIED 久世、鉄井
13:20	5. 実践プログラム案の改善検討 (40分) (1) よかった点/提案をふまえてプログラムの改善、個別相談	NIED 久世 個別相談：鉄井、伊沢
13:55	6. 実践プログラム案の模造紙展覧会 (15分) (1) 受講者全員の実践プログラム案のギャラリー方式による確認	NIED 久世
14:10	休憩 (10分)	
14:20	7. 実践に向けての私宣言！&エール (15分)	NIED 久世
14:50	8. 実践報告フォーラム2022 発表内容の検討 (35分) (1) 教師国内研修感想報告3人 (2) 2時間の実践プログラムの提供 (有志)	NIED 久世
15:05	9. 事務連絡 (25分) (1) 中間会合 (11/13、1/22) への参加確認 (2) その他	JICA 江口、NIED 川合



★ 授業実践プログラムの6つの評価指標

◇ 開発教育・国際理解教育における「学習者の学びの3つの柱」に関する指標

指標① 柱1：学習者が、「訪問国に肯定的に出会う」学びがあるか。

指標② 柱2：学習者が、「日本と訪問国との同一性やつながりに気づく」学びがあるか。

指標③ 柱3：学習者が、「共通の課題について共に考え・共に越える」学びがあるか。

◇ 学習者主体の参加型、収集教材の活用に関する指標

指標④ プログラムに流れがあり、気づきから行動へとつながるものとなっているか。

指標⑤ 学習者が、主体的に考え、学習者同士が学び合えるような問いかけや手法となっているか。

指標⑥ フィールドワークで収集・整理した教材が効果的に活用されているか。

<成果例> ★ 受講者が作成した授業実践プログラム例

Well-beingな社会を実現するために!
 ~ 貧困を事例として ~ 地頭綾香

① 企業及び団体がWell-beingな社会実現に向って様々な支援をしていることに気づく。
 ② 貧困の仕組みを知り、そこから気づかせることと変化があるか考える。
 ③ Well-beingな社会にするために何が出来るかを考える。

高校1年生36名 (Dignity) 50分×3コマ
 起: Well-beingな社会にするために解決すべき課題を見つけ企業が取り組んでいることを把握する。
 承: 貧困の仕組みを知り、貧困の仕組みを知り、解決策を考える。
 転: 企業以外の団体の支援内容を知り、支援をすることで貧困の輪のどこで切れるか気づく。
 結: Well-beingな社会実現に向って、学校個人で何が出来るかを考える。

15分 アイスブレイク: 私がhappyになれるコト-モノについて紹介する
 Well-beingな社会にするために解決すべき課題を探し、模造紙にグループで書き出す。

25分 共有
 企業はWell-beingな社会実現に向って何をしているか把握する。
 ① 復讐みH.W共有
 ② 企業の取り組みをそれぞれ書き出し、ベストなものに企業名と取り組みを見せ、SDGsシールも貼る。

5分 全体ふりかえり: 個人でClassiノート→クラスで共有

5分 アイスブレイク: この国はどこ?
 ① アフリカの肯定的な写真を見せ国を当てさせる
 ② アフリカの課題となる写真を見せ国を当てさせる

10分 貧困の仕組みを理解する。
 貧困を打ちきるためのキーワードを書きこんでいく。

20分 貧困を打ちきるために支援している団体(アイチン)について知り、支援の結果を把握する。
 ① 情報分析: 支援内容・支援を受けた人の声(40秒)
 ② 支援の前・後を比べて模造紙にまとめる。

5分 全体ふりかえり: 個人でClassiノート→グループで共有

【グループディスカッション】
 [わらし読み/共有本]
 世界規模 日本身の周り何でわ
 ① [グループ内共有] SDGsの何番か(10分) 気づきよう?
 ② [分類] 残っているSDGsシールを見て理由を考えてみよう。

【アトラクゼーション】
 どこから○○という国を考えたか理由も伝えよう。

【貧困の輪】 正解はあってはならない。貧困の輪を打ちきるために!

【貧困の輪】 + [ブレインストーミング]

① [ツグソーラ] [アイチン]資料: 支援前後を比較して線の引き分けをしてみよう!
 ② [対比表] グループ作成

誰かが学べる・夢をめざせる
 豊かな社会をつくるには? 稲 諏訪部 景子

対象 小学校5年生(32人×3クラス) 所要時間 45分×5 (375分)

展開 起 日本と世界の同じ・ちがいは? (学校編) 転 夢を叶える社会とは...?
 承 学ぶ楽しさや大切さは世界共通!! 結 夢を叶える社会つくりのために...

回.時間 プログラムの流れ 現地教材・参加型手法・主発問

1h ① 実態把握
 <アイスブレイク> 班のみんなの同じ・ちがいは? 海外の学校の様子・子どもたちの生活を知りたいか? ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

2h ② 重要性・必要性の理解
 <アイスブレイク2> 10年後(2030年)どうなっている? 「そのために必要な大切なこと」を、自分たちの意見や考えを述べた上で、他の国の人たちの考えや思い、願い、思い、希望、願いについて知る。

3h ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

4h ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

5h ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

Ⅲ. フィールドワークの様子と受講者の学び

7月26日(火)		① WAFCA、② JICA エジプト
時刻	スケジュール	備考(☆案内者)
10:30	名鉄刈谷市駅 集合 (点呼・各種確認) 徒歩8分 (約600m) →WAFCA事務所へ	◇受講者12名+同行者3名 ◇伊沢・川合 (車同伴)
	① NPO法人アジア車いす交流センター (WAFCA)	
11:00	1) WAFCAの活動紹介	★熊澤友紀子 前事務局長
12:00	2) 事務所スタッフとランチ交流	★木村隆彦 事務局長
	■ インドネシア とオンライン-----	[Zoom] WAFCA設定
13:00	3) あいさつ・自己紹介 ・WAFCAIスタッフ、車いすユーザーのカリンさんと母親、特別支援学校の先生	☆通訳：WAFCAI
13:10	4) 授業見学 (小学6年生の算数)	
13:20	5) インタビュー ・特別支援学校の先生・カリンさん、WAFCAI	スマホ撮影
13:40	6) 校内見学 (トイレ、職業訓練室等)	
13:55	7) クロージング・集合写真	

14:00	8) 国内事業「車いす病院」の視察	
15:00	視察終了・お礼 → 名鉄刈谷市駅へ	
15:19	刈谷市駅15:19→15:21刈谷駅15:37→名古屋駅15:58 徒歩JICA中部へ	
16:30	JICA中部 チェックイン (夕食、自由時間)	
18:30	セミナールームAに集合、点呼・各種確認	
	② JICAエジプト とオンライン-----	☆全体進行：NIED久世さん
19:00	1) あいさつ・自己紹介	★JICAエジプト マヤダさん
19:05	2) 専門家からのESJプロジェクトの説明 「特別活動を中心とした全人的な教育の導入」	★(株)パデコ教育開発部 瀬戸口暢浩 専門家
19:50	3) 質疑応答、意見交換	★中島 専門家
20:20	4) 感想の共有、お礼あいさつ	☆すべて日本語

21:00	1日目の振り返り、翌日準備	
22:30	解散	◆JICA中部 宿泊

① NPO 法人アジア車いす交流センター (WAFCA) / インドネシア



● 伊藤聡子

WAFCA が取り組んでいる社会課題である「障がいは個人ではなく社会にある」という言葉が心に残っている。障がいのある人が抱えている課題は、私たちみんなの課題であることを再認識した。まさに自分事として考えていかなければならない課題である。一人ひとりの身体や生活のニーズに合った車いすを寄贈したり、フォローアップをしたりすることで、子どもたちの将来の可能性の広がりを感じた。特別支援学校に通っているカリンさんの「支援を受けたことで、勇気をもっていろいろところへ出かけられるのが嬉しい。他にもいろいろところへ出かけたい」という言葉、聴覚障がい子どもたちが嬉しそうに手話で自己紹介をしていた姿。この子どもたちの姿が WAFCA の支援のすべてを物語っていた。

また、車いすの修理や点検、中古車いすの販売等で得た収益が障がいのある子どもたちの支援に使われているということを知り、社会課題の解決に向けての自分自身の視野が広がった。

● 伊藤知世

わたしは、NGO や NPO 団体を訪問したりその職員から話を聞いたりしたことは今までになかった。そこで、「NGO や NPO は理念が先頭にくる」という話を WAFCA の事務局長から聞き、「本当にその通りだ」と現場をみて感じた。政府等の支援が行き届かない現状に対して障害のある人たちも社会参加出来るようにとの熱い思いをもって活動をされており、またその思いと同じ人同士が集まれば、とても大きな力になるのだと思った。

また、「障害をつくりだしているのは、周りや社会」だということも感じた。社会の認知や理解がないと、「障害のある子どもに教育を受けさせても意味がない」という考えになってしまう。まずは家から出られるように車いすを届け、そして特別支援学校に通えるよう支援をすることで、地域のコミュニティにも知ってもらうことができる。そうやって少しずつ周りの理解を得ているように思った。だれもが安心して生活でき、学校にも通える権利をもっており、その考え方が広がっていくといいなと思った。

● ② JICA エジプト



● 高口涼

国家プロジェクトで「特別活動」を教育現場に推進していること、日本式学校を設立し教育を展開している姿を知った。エジプトの先生は大変意欲的で教育方法について意欲的に学び、実践しようとする姿が伺えた。また、勤務時間内できちんと学び実践する姿は私たちの学ばなければならない一つの視点なのかもしれないとも考えた。清掃活動導入への大きな反発がはじめはあったようだ。しかし、一つ一つ話し合いを重ね、また子供の姿から多くの人の納得を得ていく姿は日本もエジプトも変わらないし、そこには子供を大切にしたい。いい教育をしていきたいという気持ちがあるのだと印象的だった。

こうした共通点や違いを切り口に海外の国々についての理解を深めていけるような授業を作っていけたらと考える。

● 澤田直美

掃除や学級会、日直など、日本人にとっては誰もが馴染みのある活動を取り入れたことにより、エジプトの子どもたちが学校に対して前向きになり、家庭でもその学びを活かしているということだった。特に掃除に関しては、取り入れる際に猛反対があり、教育的意義を理解してもらうことに苦労したという話を聞いたが、子どもたちは家でも掃除するようになり、さらには親にも注意するようになったという。日本式教育がエジプトの子どもたちにポジティブな変化をもたらしているということに、日本人として誇りを持つことができたと同時に、日本の教育の良さを見直す機会となった。

実際には、日本ではこれらの活動は当たり前になっており、意味を持たせられていないという悩みを持つ教員も多にいる。外国の中の日本の姿を見るという珍しい機会から、こちらの教育の在り方も見直し、より意味のある活動をお互いから学び合い、模索していけたらと思った。

7月27日(水)

③ 学び舎つばさ

時刻	スケジュール	備考(☆案内者)
	<朝食> 前日夕方受取のJICA朝食弁当 チェックアウト	
9:30	セミナールームAに集合、点呼・各種確認	◇受講者12名+同行者3名
	③ NPO法人学び舎つばさ	☆全体進行：NIED久世さん
10:00	1) あいさつ・団体・活動の説明	★上田衛 理事長・事務局長 ★内川伸也さん、志水さん
	■ ベトナムとオンライン-----	[Zoom] NIED設定 (川合)
10:20	2) TSUBASAの授業風景の視察 ・先生 (グエンさん)、生徒10人 (14~18歳) ・デモ→学校・教室の様子→質疑	☆通訳：ゴックさん (別地域からオンライン)
10:40	3) 先生・生徒へのインタビュー [GroupA] TSUBASA生徒×受講者6人 [GroupB] 日福大留学生×受講者6人 ・30分で交代	☆日本福祉大学学生10人 (うちベトナム人7人) 他
11:45	4) 感想の全体共有	

12:00	5) 内川さんによる滞在記の紹介 「ベトナムフクニョン村での日本語学校つばさ支援活動」	
12:30	6) 学び舎つばさへの全体を通しての質疑応答	
13:00	終了 (お礼のあいさつ)	
お昼	<昼食>自由に	
14:00	第1回フィールドワークの振り返り等 1) ①WAFCA、②JICAエジプト、③学び舎つばさ 得られたこと、授業に生かせそうなこと 2) ⑥JICAセネガル、⑦JICALワンダ 3つのポイント/見聞きしたいこと 3) その他	★ファシ：NIED久世さん
14:55	事務連絡 (第2回の集合時間、場所、準備物等)	
15:00	終了→解散 ※ 終了時間は状況により延長する場合があります。	

● ③ NPO 法人学び舎つばさ／ベトナム



● 児玉やこ

日本語を学ぶ場をつくることで、ベトナムの人が日本で働いたり、日系の企業に勤めたりする夢を応援する学び舎つばさ。印象的だったのは、言語だけでなく文化を学ぶことを大切にしているという話である。文化の違う国で「生活する」「働く」ためには、言葉だけでなく文化理解が必要だそう。留学生も、ベトナムと日本の文化が全く違い、驚くことが多いと言っていた。つばさの皆さんが、現地のニーズを的確に捉えて、自分で働き収入を得て生きていく職業支援、地域に関係なく夢をもてる職業支援をされていることが分かった。また、日本に働き手や留学生を迎え入れるとき、多数派である私たちもこれが当たり前だと押し付けるのではなく、違いがあることを頭に入れて関わっていくことができるとよい。

「続けられる仕組みを作り、ゆくゆくは現地の人だけで学び舎を運営できるようにしたい」とのこと。生き生きと将来を語る子どもたちの夢と学び舎つばさのスタッフの夢が叶うことを願う。

● 山本実穂

学び舎つばさは、ベトナム中南部のファンランに日本語学校を設立し、ベトナムの若者が日本語を学び、将来の幅を広げるための支援を行っている。貧しい地域に生まれ育ったことで、本当にやりたいことを諦めてしまう若者が多い状況を打破したいというお話は、まさに教育を通して貧困の輪を絶ち切ろうとしている一例であると感じた。教え込みの指導ではなく、日本文化の体験や歌などを通して楽しみながら日本語を学ばせることで、日本語学習のきっかけづくりを行っていた。日本に来て働いてもらうことが目的ではなく、あくまでも若者の将来の選択肢を増やすという目的意識が指導の仕方にも表れていた。実際に生徒の皆さんは、日本に強い興味関心を持ち、日本に対して夢や希望を抱きながら勉強していた。これは、私たち日本人にとって嬉しいことであると同時に、来日した時にその「夢や希望」が裏切られる国であってはならないという責任感も感じた。このように、学び舎つばさの若者が日本に対して興味をもっているのは、運営している方々がチャム族の文化を深く理解し、文化継承の支援を行っていることが理由の一つだと思う。ベトナムと日本、互いの文化を大切にし、尊敬し合いながら共に歩んでいるところが心に残った。

8月3日(水)

④コーヒー生産地と協働する会、
⑤JICA セネガル、⑥JICA ルワンダ

時刻	スケジュール	備考(☆案内者)
14:30	セミナールームAに集合、点呼・各種確認 ④ NPO法人コーヒー生産地と協働する会	◇受講者12名+同行者3名 ☆全体進行：NIED久世さん
15:00	1) あいさつ・団体活動の全体像及びルワンダ紹介 ・説明→質疑応答 ■ ルワンダとオンライン-----	★古賀聖啓 代表 [Zoom] NIED設定 (川合)
16:00	2) 事前録画の映像や写真を用いた活動活動地の紹介 3) 事前録画の関係者インタビューの再生 4) 現地スタッフ、古賀さんへの質問やインタビュー	★ルワンダ都市部スタッフ ☆通訳：
17:30	----- 終了 (お礼のあいさつ) ⑤ JICAセネガル 「看護師・助産師の臨床実習の質向上プロジェクト」 ■ セネガルとオンライン-----	☆全体進行：NIED久世さん [Zoom] NIED設定 (川合)
18:00	1) あいさつ・セネガル・重点協力分野紹介	★吉水 次長
18:05	2) プロジェクトの概要説明	
18:20	3) セネガル人スタッフ、保健担当NSによる活動紹介	☆通訳：セネガル事務所
18:40	4) 質疑応答	
19:00	終了 (お礼のあいさつ) -----	※若干の延長可
夜	<夕食>自由に ※チェックイン	
20:45	セミナールームAに集合、点呼・各種確認 ⑥ JICAルワンダ 「ICTを活用した初等理数科学びの改善プロジェクト」 ■ ルワンダとオンライン-----	☆全体進行：NIED久世さん [Teams] JICA設定
21:00	1) あいさつ	
21:03	2) プロジェクト日本側専門家による説明→質疑	★古川 専門家
21:18	3) 教育省役人との意見交換	★教育省役人
21:38	4) イノベーションセンター内視察	☆Immaculate
21:48	5) 学校配属の協力隊員 (2021年1&2次) 意見交換 ・隊員2人&受講者4人を3グループに分かれて	◇石井理紗子 (小学校教育) ◇竹本栞 (小学校教育)
22:18	6) 全体で感想等共有	◇伊藤隼 (理科教育)
22:30	終了 (お礼のあいさつ) ----- JICA中部宿泊	◇藤原琢馬 (小学校教育) ◇坂口琢真 (理科教育) ◇伊藤隼人 (体育)

● ④ NPO 法人コーヒー生産地と協働する会／ルワンダ



● 伊藤聡子

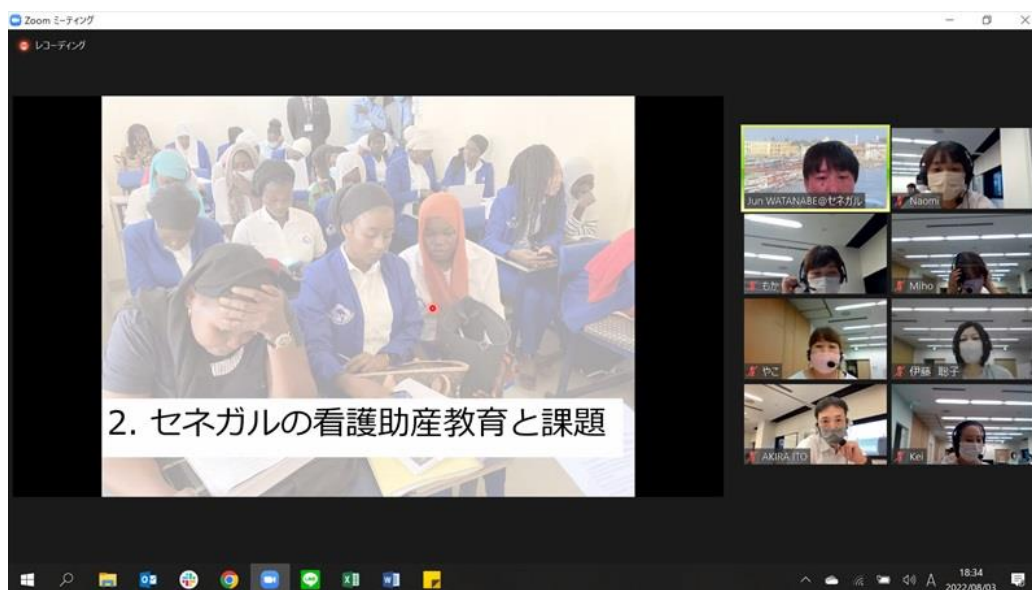
「コーヒーの品質を向上させることより、土壌を改良することを目的として活動している」という古賀聖啓さんの話に衝撃を受けた。土は永久的に残り続けていくものではなく、使えば消耗する資源。今を生きている人々さえよければいいという考え方ではなく、その土地で暮らす子どもたちの世代まで、さらに10年後、20年後も変わらずコーヒーの収穫ができるような支援をしていることに感銘を受けた。また、すべてを支援すると自立心を奪ってしまうことになるという話を聞き、コーヒー農家の人たちが自分たちの手でよりよくなる方法を考えながらコーヒー栽培ができるようなサポートをしていくことの大切さを感じた。驚いたことに、コーヒーを栽培している農家の方は、自分たちが栽培しているコーヒーを飲んだことがないということだった。コーヒー農家の方が、丹精込めて作ったコーヒーを飲んだ感想を、日本から伝えたいと思った。

● 伊藤知世

NPO 法人コーヒー生産地を協働する会は、ルワンダのコーヒー農家を支援している。わたしは、農家の支援と聞いて「どのくらい収入が向上したのだろうか？」とまずは疑問に思った。しかし、代表の古賀さんからお話を聞き、自分の考えが浅いことに気がついた。なぜなら、わたしは支援をするということは、結果がすぐに出るもの、目ではっきりと見える結果を出すものだと思っていたからである。

ルワンダでは、子どもの世代に残せる一番の財産は畑だそう。古賀さんは、コーヒー農園の土壌を調査や聞き取りをし、今あるコーヒー農園が何十年、何百年と続いていくように土壌改善のための肥料の支援を行っているとのことだった。そのため、今、品質向上や収入向上につながっているわけではない。すぐに結果は出なくても、農家さんが農地の変化に気づいて喜んでくれたり、自分たちで肥料の重要性に気づいて自分たちで何とかしようと思ってくれたりすることを大切に活動されていることがわかった。

⑤ JICA セネガル



● 伊藤彰

日本との同一性に気づくという点において、セネガルでは農業や漁業が盛んで、お米が主食であることがわかった。また、慣習的な面では平和とおもてなしを重んじ、国民性においては連帯感や一体感が強く、争いごとを好まないことがわかった。

「看護師と助産師の臨床実習の質向上プロジェクト」について、このプロジェクトが発足された理由に納得できた理由として、まずセネガルの出生率は日本の約4倍であるという事実、一方で国土面積は日本の半分であるものの人口は約1700万人と日本の約1/7である事実がある。実際の説明にはなかったが、これらの関連性からセネガルでは依然として乳幼児の死亡率が高いことが推測できる。実際には教員の指導力不足に合わせ、現場での実習不足、連携不足、人材不足、設備不足等、早急に解決すべき課題が多いことがわかったが、ここ日本でも近年、コロナ禍における病床のひっ迫で妊婦が入院できず新生児が亡くなった事例もある。セネガル特有の課題もある一方で、実際は日本でも同様の課題を抱えている。それ故共通の課題として捉えるべきだと強く感じた。

● 菊地純奈

私が強く印象に残ったことは、セネガルでは「病院の施設長は看護師で、医師がいる病院は少ない。」ということである。日本では病院に行けば、医師・看護師がいるのは当たり前で、医師の判断のもとに薬が処方されたり、看護師が手当てをしてくれたりする。そのような環境で生活していると、病院に医師がいなくて、どのように病院が回っているのか想像するのが非常に難しいが、セネガルではそれが普通のことと、また、慢性的に看護師・助産師が足りてないという課題がある。理由としては、実習準備が不十分、教材の未統一、評価基準が一定でない、環境面が整備されていない等があるようだ。

日本で生活している私の当たり前が、一步世界に出たら、当たり前ではなくなることを、改めて実感しました。今後行う授業の中でも、私が感じた「えっ!」「どうして?」という驚きや衝撃を、子どもたちに少しでも感じてもらえるような授業づくりを目指したいと思う。

⑥ JICA ルワンダ



● 伊藤彰

アフリカの内陸部に位置し、その地理的に不利な状況から ICT 教育に着目し、経済成長に取り組んでいる。特に日本の強みを生かして、ルワンダでも理数系の教育分野に注力している。東アフリカ全域に普及しているモバイルマネーも利用でき、国民の生活に深く浸透している。

まず、専門家の方の話から印象的だったのが、適正年齢で小学校に入学する児童は 81.5%に留まり、6 年生まで進級できる児童数は約半分になってしまうことだった。日本との大きな違いでは、自動進級制ではないこと、そして 1 コマ 40 分の授業において実質の学習時間は 52%であり、その原因が生徒だけでなく、教員の欠勤や遅刻も多くの割合を占めており、授業に対する意識に大きな差を感じた。

次に協力隊の方の話から印象的だったことは、1 クラスの生徒数が 40~50 人以上と多く、生徒たちは教科書を持っていない。学習量が多く詰め込み教育になっているため、生徒が追いつけず、理科においては実験を行っても生徒はわかったふりをしてしまうことが多い。学校にネット回線はあるものの実用レベルには達していきなく、ICT 教育を訴えている政府の方針と現場での実情には大きな隔たりがある。日本とは教育制度が異なるが、教育自体の重要性と教える側の意識と技術の向上は ICT 教育に関係なく共通の課題であると感じた。

● 菊地純奈

私が今回お話を聞く中で特に印象に残ったことは、3 点ある。まず 1 点目は、「小学校に入学しても、6 年生まで進学できる児童の割合が約半分程度ととても低いこと」である。理由は、様々あるようですが制服を購入するお金がないことや子どもが働き手として必要なこと、また保護者や子どもが学校教育に価値が見出せていないことがあるそうだ。2 点目は、「教科の理解度が、英語よりも現地語の方が高いこと」である。これはとても興味深い、ルワンダでは各教科の授業が英語で行われているため、学習内容は理解できているのに、言語（ここでは英語）が理解できていないために、問題を解けない児童が多くいることが分かったということだ。3 点目は「教員が不足していること（毎月 1000 人ぐらいの退職）」です。低賃金であることが大きな理由だということだが、教員が魅力的な職業として捉えられるような取り組みが求められると感じた。この点については、日本の教員不足にも通じる部分があり、共通の解決策を探していくことができるのではないかと思います。

8月4日(木)

⑦ アイキャン

時刻	スケジュール	備考(☆案内者)
	<朝食> 前日夕方受取のJICA朝食弁当 チェックアウト	
9:45	JICA中部口ビーに集合・出発→徒歩12分	◇受講者12名+同行者3名
10:05	地下鉄名古屋駅→10:10栄駅10:14→矢場町駅10:15 4番出口から徒歩4分	
	⑦ NPO法人アイキャン	
10:30	1) あいさつ、日本事務局（名古屋）の活動紹介 ■ フィリピンとオンライン-----	☆全体進行：NIED久世さん ★古谷小夏さん
11:00	2) 駐在員による事業地「子どもの家」中継	[Zoom] アイキャン設定 ★駐在員：
11:20	3) 路上の子どもたちへのインタビュー 駐在員へのインタビュー 4) 事業地の皆さんへお礼のあいさつ -----	☆通訳：アイキャン
12:00	終了（日本事務局へのお礼のあいさつ） <昼食>自由 ※JICA中部までの移動も自由 （上前津駅→名古屋駅）	
13:50	セミナールームAに集合	
14:00	第2回フィールドワークの振り返り等 1) ④コーヒー生産地と協働する会、⑤JICAセネガル、 ⑥JICALワンダ、⑦アイキャン 得られたこと、授業に生かせそうなこと 2) その他	★ファシ：NIED久世さん
14:55	事務連絡（第3回の集合時間、場所、準備物等）	
15:00	終了→解散 ※ 終了時間は状況により延長する場合があります。	

⑦ NPO 法人アイキャン／フィリピン



● 高口涼

住む家と教育、フェアトレードの機会を提供している団体で、日本だけではなく、現地フィリピンでも活動をしている。現地の法令を守りながら子供たちへの支援活動をしていきたいという姿勢が印象的だった。今回話を聞いた家は男の子しか住んでおらず研修生からも質問が出ていた。回答では、男の子と女の子の住む家を分けるように当局から指導をされているというものだった。

資金面を考えると一つの建物で子供たちの支援ができれば効率が良いと考えてしまうところであるが、そればかりを通すのではなく、指導を守りながらも子供の権利を守り、将来を作っていく活動について学んだ。学ぶことの尊さ、当たり前で生活ができていることの根底に流れている権利について見つめなおす機会にできるのではないかと考えた。

● 澤田直美

フィリピンという国にはどこことなく馴染みがあり、発展が進んでいるイメージがあったが、実際には経済格差が大きく、ストリートチルドレンは推定 25 万人を超えるという。「生きるためには悪いことをするしかなかった」という子どもの言葉には衝撃を受けた。

アイキャンの「こどもの家」では、ストリートチルドレンを保護している。大人に不信感を持つ子どもたちと接するのには苦勞もあるが、一人の人間として尊重して接し、少しずつ信頼関係を作っているそうだ。実際にオンラインで話を聞いた子どもたちはとても明るく、夢を持ち、前向きに生活を送っていた。この活動のこどもの将来に与える影響の大きさを感じた。

「何かをしてあげる、支援をする」という目線ではなく、「ともに活動する」というアイキャンの考えに感銘を受けるとともに、共感した。貧困や争い等、言葉だけでは大きく感じてしまう問題を自分事として捉え、できることはないか考えるという視点を授業でも取り入れていけたらと思った。

8月7日(日)

⑧ DIFAR(森の音楽祭)

時刻	スケジュール	備考(☆案内者)
8:00	近鉄名古屋駅構内に集合→点呼・各種確認	◇受講者10名+同行者2名
8:15	近鉄名古屋駅8:15発→伊勢中川駅9:39着 (乗換) 9:44発→川合高岡駅9:47着 (改札出て徒歩4分) JR一志駅9:56発→伊勢竹原駅10:34着	
10:35	DIFAR送迎→レイクサイド君ヶ野無料駐車場まで 徒歩15分 (1.5km) 森林浴を楽しみながら会場へ	
11:00	⑧ NPO法人DIFAR 森の音楽祭 ※基本的には自由に音楽祭に参加 ※瀧本さんの手が空いた時にあいさつ・対話 <昼食>自由 ※NPO法人日本ポリビア協会人のブースで意見交換	
森の音楽祭は、津市美杉町の静かな山中でポリビアと日本を結ぶ架け橋として行ってきた音楽祭です。南米の音楽を中心に歌や踊り、食事や遊びを通して非日常な空間で楽しく1日を過ごしましょう！小川での遊びや、ツリーハウス、ダイナミックなブランコ、石窯ピザ焼き体験なども人気です。 ◇ 開催時間 10:30～15:30 (10:00 受付) ◇ 開催場所 三重県津市美杉町八手俣佐田 191 杉の森 野外劇場		
15:00	撤収 (お礼のあいさつ) 徒歩15分無料駐車場→DIFAR送迎→伊勢竹原駅へ	※駅までの時間を考慮して 切り上げ
15:35	伊勢竹原駅15:35発→松阪駅16:34着 (乗換) 16:40発→近鉄名古屋駅18:07着	
18:10	事務連絡 (第4回の集合時間、場所、準備物等) 終了→解散	

● ⑧-1 NPO 法人 DIFAR / 森の音楽祭



● 諏訪部景子

2012年から国内の地域課題にも目を向けた活動として、津市美杉町で毎年夏に「森の音楽祭」を行ってきた。事務局長の瀧本規久子さんの話から、「子どもたちに知って欲しい豊かな森の風景、家族と過ごす豊かな時間、人種や年齢を越えたみんながいきいき出来るコミュニティづくり、南米の音楽と文化交流、地元で頑張る人を応援する出店」など多くのテーマをもって活動していることが分かった。実際にツリーハウスや、ピザ窯、手作りのお店やステージでのコンサートなど様々な企画を通じて集まった人たちが、とてもびのびと過ごす姿が印象的で誰もが思わず笑顔になっていく空間だった。子どもだけでなく、大人もわくわくする工夫が随所にあった。

瀧本さんへのインタビューの中で特に印象的だったのが、「ここにはお金には変えられない子どもたちの成長や気持ちがみられることがある。排除しない関係づくり、支え合いに共感してくれる。それがとても嬉しい」という言葉。手作りのお店づくりや家族の手助けになるアクションを自分で考えたり、自然と一緒にいる喜びを感じたりするからこそと語ってくれた。

また、山を守る事で、「海につながる水の豊かさ」「里山の豊かさ」を未来につなげたい思いもあると教えてくれた。先代の家族が守ってきた土地への愛着と同時に、人の心の豊かさ、未来に残す土地の豊かさまで視野に入れて、包括的に活動が続けている姿に感銘を受けた。

● 森谷朋香

森の音楽祭では、様々な国の料理や雑貨の出店があり、異国の味を楽しむことができた。それだけではなく、南米やアフリカの音楽の生演奏が聴けたり、大人も子どもも参加できるゲームがあったりして、老若男女国籍問わず楽しめるイベントだった。事務局長の瀧本さんは、「みんなが楽しめる空間を作るには、まずは自分が楽しむこと」を大事にあり、楽しませるのではなく一緒に楽しんでいく姿勢が感じられてとても印象的だった。また、イベントの最後には、みんなでダンスして盛り上がる場面があり、音楽やダンスで言葉は通じなくても心は通じるのだと感じた。

8月23日(火)

⑨JICA ラオス、⑧DIFAR

時刻	スケジュール	備考(☆案内者)
13:30	セミナールームC-1に集合、点呼・各種確認	◇受講者10名+同行者3名
	⑨ JICAラオス 「教育基盤強化プログラム」	☆全体進行：NIED久世さん
	■ ラオスとオンライン-----	[Zoom] NIED設定 (川合)
14:00	1) あいさつ、ラオス紹介	★長岡 専門家
14:05	2) ラオスの教育の全体像について	★金城 隊員
14:25	3) 算数教育、教科書について	★蓮池 隊員 or 久保 隊員
14:40	4) 授業実践紹介	
15:00	5) 質疑応答・意見交換 (2つのグループに分かれて)	
15:30	6) 全体の共有、意見交換	
15:50	終了 (お礼のあいさつ)	※16:00まで延長可

	チェックイン	
夕	<夕食> ※必要に応じてワークを入れる場合があります。	
21:00	セミナールームAに集合、点呼・各種確認	
	⑧ NPO法人DIFAR	☆全体進行：NIED久世さん
	■ ボリビアと2元中継オンライン-----	[Zoom] NIED設定 (川合)
21:30	1) あいさつ、DIFAR全体の活動紹介	★瀧本里子 代表
22:00	2) 小学校コンポストプロジェクト成果発表会 ・子どもによる発表→コメント ・インタビュー (質疑応答)	★城井 さん ☆通訳：DIFAR
23:00	3) 小学4年生自然環境プログラム紹介 ・説明→質疑応答	★瀧本 さん
24:00	終了 (お礼のあいさつ)	

	事務連絡 (翌日の案内等)	
	解散	◆JICA中部宿泊

● ⑧-2 NPO 法人 DIFAR/ポリビア



● 地頭綾香

日本の良い取り組みをそのままポリビアに導入するのではなく、現地のニーズをしっかりと確認したうえで、運営されていることが分かった。また、現地の人にも必ずかかわってもらうという仕組みをとることで、現地の人も「自分ごと化」でき、また「持続可能」となるのだと思った。6年生の取り組みの発表会では、子ども達がコンポストに対して、非常に前向きに取り組んでいることが伝わってきた。各家庭の生ごみを持ってくる所からスタートすることで、家族も巻き込んでいる点も非常に興味深かった。

また、4年生に向けた環境に関する講習では、子ども達の意見に耳を傾けながら身近な話題を中心にして、授業が行われていた。問いに足して、自分の意見や経験を積極的に他者に伝える生徒達の姿が非常に印象に残っている。こういった小学校段階での DIFAR の環境教育との出会いは、子ども達に確実に意識変化をもたらしていることが、児童の発言からも伺えた。

● 諏訪部景子

「今日の家族の安心明日の家族の希望」を抱ける持続可能な社会づくりのため、ポリビアの農村部に住む人々の生活改善を20年ほど前から行ってきた。瀧本里子さんを中心に、食料確保のためのネズミバンク、衛生対策のエコサントイレの設置事業、生ごみを肥料として活かすコンポストの活動など、様々な取り組みをしてきたことが分かった。

インタビューの中で、印象的だったのが、「現地の人たちが、自分達の手で生活を良くしていけるよう、しっかりとニーズや現地にあった方法話し合うこと、考えを押し付けないこと」という言葉。多くの人に関わってもらい、裾野を広げていくことを大切に活動を展開していた姿に、持続可能な未来を作っていくためには、自分達が良いと思う事を勧めるだけでは足りないんだということにも気づけた。

近年では、未来を担う子どもたちへの環境教育にも力を入れ、小学校4年生向けの環境プログラム（循環型社会、ゴミの分別の仕方を学びきっかけ）や6年生対象のコンポストプロジェクト（堆肥づくりをして野菜の栽培に還元する活動）も盛んに行っていた。学校や孤児院で学んだ子どもたちが、実際に家や地域の大人に活動の実際を前向きに伝える姿、自分達に出来ることから地球環境の未来にアクションを起こそうとしている姿から、ゴミ問題に対するポリビアの人々の意識の変化が伝わってきた。

● 森谷朋香

DIFAR では、「現地の人と一緒に考えて行動する」をモットーに、持続可能な社会実現のため、ゴミ問題に取り組んでいる。エコサントイレ（トイレに溜まった汚物と灰を合わせておくことで、堆肥化する）を作るときは、どこにどのようなトイレを作るかを現地の人とよく相談して決め、一緒に作ることを大事にしている。また、学校や孤児院でコンポスト（生ゴミを堆肥化する）を取り入れたり環境教育を進めたりする活動も行っている。子どもたちに対してこのような活動をすることで、自分たちで環境を守っていく意識を強めたり、やり方が各家庭に伝わっていったりする良さがある。自然の価値や環境を守る必然性を、体験を通して学ぶことで、日常生活に落とし込んでいくことができるのかもしれないと感じた。

● 児玉やこ

「ポイ捨てする?」。環境教育を推進しているボリビアの学校の子どもたちが、分別ゲームに取り組んで知識を得ても、ポイ捨てしてしまう習慣から抜け出せないという話を聞いた。素直な子どもたちにほっこりしながら、その行動の矛盾について考えたが、自分も同じようなことをしていることに気付いた。最近、エシカル消費に興味があり、プラスチックフリーの商品や海洋ごみの再利用商品などを購入しようと心がけている。しかし、夏休み面倒な日はコンビニでプラスチックが大量に使用されたお弁当を手に入れている。ちょっとがんばって歩けば環境のためになるのに、暑さや時間のせいにして車に乗っている。

それでも、知らないより知った方が意識が高まる。全ては無理でも、できることからやってみる。やらないよりは一歩踏み出した方がいい。生徒たちも、今一緒に世界についているいると考えても、すぐに行動につながることは少ないかもしれない。しかし、今蒔いた種がいつか芽を出し、花を咲かせると信じて、国際理解教育をこつこつと進めていく。

● ⑨ JICA ラオス



● 児玉やこ

教員養成校や附属学校で教授法を改善するにあたり、現地の先生の困り感がないことやラオスと日本の文化の違い、生活スタイル（働き方）の違いによって苦勞されたと聞いた。困り感がない現地の教師に改善の必要性を伝えるために、コミュニケーションをしっかりと取り、相手の良いところを伝えて信頼関係を築くところから始め、地道に活動を重ねていることが分かった。ラオスの人の助け合い精神「スワイカン」やおもてなしを大切にする話を聞いて、ラオスの人の温かさを感じた。テストのときにも発揮される「スワイカン」に協力隊の方が驚いたそうだが、否定するのではなく、どうするとよいか現地の教師と一緒に考えるスタンスが素敵だと思った。その土地の文化や風習、当たり前が違う中でどう歩み寄るのか考えたり、あっていい違いとあってはいけない違い、守っていくべき伝統を見極め、現地の人と一緒に変えていったりすることは、とても大変なことであるが、支援後も持続可能なシステムを作るには必要不可欠である。もどかしさを感じながらも、熱意をもって活動する JICA ラオスの皆さんに感銘を受けた。

少数民族やへき地の貧困による教育格差についても話が出た。教育格差を是正する取組についても興味があった。

● 地頭綾香

初等教育における算数学習改善プロジェクトの取り組みの課題や成果について学んだ。現在ラオスでは、東京書籍と共に開発された教科書が導入されており、指導方法も変化が見られている。これまでは、教員側が一步通行で授業をすることが当たり前であり、「教える＝言葉で教える」ことだと考えられており、思考力を育てる授業は行われていなかった。しかし、新しい教科書が導入され、また協力隊の方や専門家の方が携わることで、指導方法に変化が見られ、参加型の授業なども増えており、子ども達のやる気へと繋がっている。協力隊の方々の報告を通して、ラオスの先生方としっかりと向き合い、現場のニーズを的確に理解していることが伝わってきた。また、今すぐ実践してもらえなくても、種をまいていくという姿勢を非常に大切にしており、そういった姿勢こそが「持続可能」に繋がるのだと分かった。同年代の方々の活躍に励まされると共に、自分の生徒にもビジョンを持って社会に出て欲しいという思いが強くなった。

● 遠山桂吾

算数の教科書に日本式が導入され、以前使われていた教科書と比較されていた。以前のものは文字が多かったのに対して、新しいものはイラスト等があり見やすい印象であった。絵やイラストなどを使って見やすくすることはとても重要だと感じた。

協力隊の方は現地の先生に授業のアドバイスをもらいたいと思うが、現地の先生方の気持ちや現地のやり方を尊重し、話をよく聞いて、その中でできることを共に考えるという姿勢が素晴らしいと感じた。協力隊の方に話を聞くと皆さんその点を強く意識しているということが分かった。相手の立場に立って考えるということは今後意識していきたいと思った。

現地の先生の授業の様子を動画を見て、日本と同じようなことをしていると思った。今までのやり方を大きく変えたと想像できるが、そういった学び姿勢や変化を肯定的に受け入れようとする姿勢は自分も持っていたと感じた。

8月24日(水)

全体振り返りワーク

時刻	スケジュール	備考(☆案内者)
	<朝食> 前日夕方受取のJICA朝食弁当 チェックアウト	
10:20	セミナールームAに集合、点呼・各種確認	◇受講者12名+同行者3名
	第3・4回フィールドワーク及び全体の振り返り等	
10:30	1) ⑧ DIFAR、②JICAラオスで得られたこと、 授業に生かせそうなこと 2) 教材づくり、授業実践に向けて 3) その他	★ファシ：NIED久世さん
11:55	事務連絡 (事後研修および報告書提出の案内)	
12:00	終了→解散 ※ 終了時間は状況により延長する場合があります。	



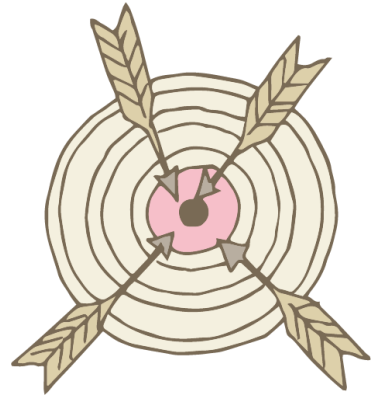
IV. フィールドワーク後の報告

● フィールドワーク研修報告書

1. フィールドワークに対する各自の目的とその達成度

● 伊藤彰

研修後の実感として、事前に掲げた私たちのミッションにある<知る・考える>の観点からは、特に①今を知る、②現地の実際やそこで働く人の思いや活動を知る、③世界を身近に感じて自分事に！の3観点への満足度が高かった。この一つの要因として今回の国内研修の最大の魅力でもある8ヶ国とつながることができたという点も大きい。8ヶ国の専門家の話、協力隊の方の話、現地の人たちとの交流、日本で活動するNPO法人の方との交流を通して、共通の考え方、活動への思い、それぞれの国の魅力を知ることへの気づきと新鮮さを感じ、そして同時に解決すべき多くの課題を目の当たりにした。また、個人的にはこれまでに訪れたことがない国々をとて身近に感じることができ、改めて日本との同一性と世界の多様性に気づき、そして海外は魅力と可能性であふれていると再認識できた。このことがふとした毎日の生活の中においても物事の見方や捉え方に変化をもたらしていると実感している。



● 伊藤聡子

長引くコロナ禍により、「世界とのつながり」「人と人とのつながり」が希薄になってきたと感じるようになった。そこで、世界や人とのつながりが実感できるような国際理解教育がしたい。そのために、海外や国内で国際協力を携わっている人たちの活動の様子や活動に対する想いを知りたい。また、本研修での学びを教材化することで、自分たちが世界やたくさんの人とつながっていることを知り、自分にできることを見つけて行動につなげることができるような実践を行い、子どもたちの視野を広げたいという目的をもって臨んだ研修であった。多くの国際協力団体の方から、海外や国内での活動、活動に対する熱い想いを学ぶことで、私自身が「世界とのつながり」「人と人とのつながり」を実感することができた。SDGsの達成を目指している2030年まで残り8年となった今、本研修で学んだことを教材化して実践することで、目の前の子どもたちの意識や行動の変化につなげられるような種をまき、「持続可能な社会の創り手」としての花を咲かせることのできる子どもたちを育てていきたい。

● 伊藤知世

今年度異動した勤務校は、外国籍児童がどのクラスにも在籍しており、家庭環境も多種多様である。そのような中で誰もが自分に自信をもち、相手のことも認め、尊重できるような子どもたちを育てたいと考えた。そのためには、まずは自分自身が世界のことを知り、子どもたちと一緒に学習していきたいとの思いから、本研修に参加した。フィールドワークでは、さまざまな国に対して支援をしている方々と出会った。彼らがどんな思いで活動をしているのか、自分の想像以上の熱い思いが伝わってきた。NGOの職員、専門家、協力隊員、いろいろな立場があるが、それぞれに自分のできることやすべきことを遂行されていた。そして誰もがその国に住む人々の未来を考えており、「自分も行動しなければ！」と強く感じた。今回知ることができた活動内容や、そこで活動している方々の言葉から感じ取ったことや学んだことを、クラスの子どもたちにも還元したいと思った。

● 菊地純奈

目的：中部地方にある国際協力の団体や、海外のJICA事務所や協力隊の方々とのつながり、情報を得ること。

国内での国際協力の取り組みや、自分たちにできることを知ること。その情報を元に、2学期から授業を計画・実践して、自分の学んだことを子どもたちや職場の人々、自分の周りの人々に還元すること。

達成度：様々なフィールドワーク先で、色々な取り組みがされていることを知った。また、海外のJICA事務所とつないで話を聞く中で、その国と日本との共通点・相違点に気付くことができた。その国に住んでいるからこそ分かること・感じることや、活動をする中での大変さや楽しさについて直接話を聞くことができた。フィールドワークを終えて、どのような授業にしていくかまだはっきりとは決まっていないが、子どもたちが肯定的にその国や人々と出会い、主体的に学べるような授業を組み立てていきたい。また、自分の興味がある分野と子どもたちの関心が高そうな分野を上手く組み合わせる授業をしていきたい。

● 高口涼

目的：昨年度学んだ開発教育の手法をさらに実践的にするため。また、国内での国際協力の取組や、自分たちにできることを知り、考えるため。まずは、授業を計画・実践して、自分の学んだことを身近な子どもたちや、周りの人々に還元すること。一方で、ライフワークになりつつある道徳教育研究や防災教育研究と結びつけて新たな知見を社会に還元していきたいと考えたから。

達成度：国が違えば事情が違うという当たり前のことを生の声を通して知ることができた。フィールドワークを終えたばかりの現在、どのような授業にしていくかまだはっきりとは決まっていない。しかし、今回の研修を通して学んだことは、子どもたちが肯定的にその国や人々と出会い、主体的に学べるのが大切であるという視点である。夏休み前までは国旗の本を何冊も教室に用意し、世界クイズやニュースで出たところチェックを少ししてきているので結び付けられたらいいなとも考えている。

● 児玉やこ

世界の現状を知ること、生徒を世界と肯定的に出会わせたり、教室と世界をつないだりしたい。世界で国際協力に貢献する人の活動や想いを知り、目の前の生徒たちに伝えることで、将来世界に羽ばたいたり、世界と関わる仕事に就いたりする人材を育てる国際理解教育を実践していきたいと考えている。今回の研修に参加することで、さまざまな国の今や世界で活躍する多くの人について見聞きでき、多角的に世界の課題や国際協力について知ることができた。その中でも、「人の魅力」に圧倒された研修であった。現地の子どものとびきりの笑顔、現地で暮らす方の希望を宿した瞳、信念に基づいた行動力と人間愛にあふれた温かい日本人。私の国際理解教育の先に、こんな世界が広がっていてほしいと思える出会いがたくさんあった。

現地はオンラインでの訪問であったが、多くの人のお陰で十分な学びがあり、研修参加目的を期待以上に達成したと感じている。

● 澤田直美

生徒が海外との繋がりを「実感」として感じられるような教育を行うヒントを得ること、私自身が外国の現状について理解を深めることを目的として今回の研修に参加した。今回、訪問した施設やオンラインで話を聞いた国の人々からは、日本では想像できないような現状を知ることができた。学校を卒業できない子どもが多い国、カンニングが当たり前になってしまっている国、病院のシステムが整っていない国、野菜を育てる土壌がそもそも整っていない国など、問題が山積みだと知ることができた一方、自己肯定感の高い人々や、夢を持てるようになった子どもがいる国が多いことなど、明るい気持ちになる現状も知ることができた。

今の生活が当たり前ではないことを再確認するとともに、外国から学べる事はとても多いと実感し、生徒と共に学ぶ機会を増やしていきたいと思った。また、自分ができることを考え、行動に移していけるような授業を考えるきっかけを得ることができた。

● 地頭綾香

本研修に参加した目的は、大きく2つある。1つ目は、コロナ禍であっても、生徒達が海外との繋がりをとめないために、まずは自身が「世界を身近に感じ、現地で働く方の思いや活動を知り教材化する」ためだ。この点に関しては、実際に活動をしている方々の話を聞くことで、活動への思いや活動の課題などを知ると共に、各国の文化などにも触れることができ、今まで名前しか知らなかった国を身近に感じられるようになった。また、生徒達が「肯定的」に各国と出会える題材も見つけることが出来たといえる。2つ目は、「研修の経験を参

加者の先生方と共に共有し、様々な視点を得たい] と思ったためだ。研修では、同じテーマで話を聞いていても、それぞれ違った視点に注目をして受けとめていた。コロナ禍になり、自分一人で学ぶことが多くなっていった私にとっては、学んだことを共有できる機会は非常に貴重な経験となった。今後は、フィールドワーク先の方々の活動を通して得た気づきを生徒達に還元し、国際社会で活躍できる人材育成に貢献していきたい。

● 諏訪部景子

目的：中部地区を拠点に活躍する国際協力団体や現地の JICA 事務所や協力隊の方々となつたり、活動の実際についての情報を得ること。国内外で活動する上で大切にしている考えや想いを聞くこと。活動の内容を詳しく知り、今の自分達の立場から一緒に取り組めることを考えること。今回の研修で学んだ情報を元に、授業や広報の活動計画を立て、現場に還元し、2 学期から職場の子どもたちや職員と一緒に「国際協力」のための一歩を踏み出す。

達成度：それぞれのフィールドワーク先訪問、リモートでの交流を通して、様々な取り組みをしていることが分かった。日本国内で出来る活動、現地の人々と交流する中で課題に向き合い試行錯誤したものなど非常に多くの工夫をしていることも知れた。現地の職員や協力隊、留学生へのインタビュー活動では、日本との共通点・相違点を具体的に知ることができ、自分の中にあるステレオタイプにも気づくことが出来た。実際に授業を組み立てる上でも、「訪問国と肯定的に出会う」ための視点になると感じた。多くの方と交流し、「目の前の状況を少しでも良くしたい」という熱い思いに触れることができた。実践する授業の中でも、人権・環境など様々な話題を切り口に、「自分と世界とのつながり」を感じられるよう、一人一人が興味を持って主体的に考えられるワークを提案したいと考えている。

● 森谷朋香

私の現地研修の目的は、世界の様々な課題と解決するための取り組みや、国際協力の活動をしている方たちの理念や思いなどについて学ぶことであった。なぜなら、一人一人が広い視野をもち、持続可能な未来をつくるために何が出来るかを自分で考え行動できる子どもを育てたいという思いがあり、そのためには、世界の様々な課題と解決するための取り組みを知ることで自分にできることを考えたり、国際協力の活動をしている方たちの理念や思いを知ることで多様な価値観に触れたりすることが大切であると考えたからである。

現地研修では、様々な国に対しての国際協力の活動の様子を見たり、支援の概要を聞いたりすることで、世界の様々な課題と解決するための取り組みについて現実感を伴って学び、国際協力の活動をしている方たちのそれぞれの理念や思いを知ることで、その大切さや共通点に気付くことができた。今後実践をしていくために、さらに自分で調べたり、現地研修でできたつながりを活用したりしていきたい。

● 山本実穂

私は2つの目的をもって参加した。1つ目は「現地の実際を知ること」である。現在担任している小学5年生の子どもたちは、「SDGs」という言葉を聞いたことはあっても、身の回りの問題を地球規模で考える視点はまだまだ育っていない。大人も子どもも、コロナ禍で世界とのつながりを感じにくい今だからこそ、海を越えた国でどんな現状があるのか、自分が見たことや聞いたことを教材化し、授業実践に活かしたいと考えた。2つ目は、「支援に関わる人の思いに触れること」である。そこで働く方の生の声に触れられるのは、現地研修の醍醐味である。今回の現地研修を通して、2つの目的を達成すると共に、持続可能な支援の重要性を感じた。支援に関わる人たちは、あれもこれもと手を伸ばすのではなく目的を絞って活動したり、最終的には現地の方だけで運営できる体制を目指したりしていた。その支援によって笑顔になる人たちのためを本気で思っているからこそその線引きなのだと感じた。誰1人取り残さない持続可能で多様性と包摂のある社会を実現するためには、支援の仕方も持続可能なものでなければならないということを学んだ。では、私たちは SDGs の達成のためにどんなことができるのか、継続的に取り組めることは何かを、子どもたちと考えていきたい。

● 遠山桂吾

国際協力に関わる方や団体、途上国の人たちから直接話を聞くという経験はなかなかできない。この貴重な経験を生かして学んだことを教材化し、授業や研修に生かしたい。また、参加型の手法を取り入れたプログラムの作成方法やオンラインで海外と繋がる方法を学び、教育現場に還元したいと考え、本研修に参加した。

達成度は、柱1、柱2、柱3それぞれの観点から学ぶことが多くあり充実した研修になっている。実際に支援の活動をしている人や現地の人と交流することで、世界の課題を自分事として捉えるようになってきた。自分の中の大きな変化であると感じている。

その他、研修や授業で使ってみたいと思う素材が見つかったり、所属校と海外をオンラインで繋げたいと思ったりして、具体的な取り組みまで想像できているところも達成度として高いと感じている。事後研修でさらに具体性を高めたい。

2. 柱1世界（訪問国・その国の人々）と肯定的に出会う」という観点から学んだこと

● 伊藤彰

自分自身が訪れたことがない国については、知らないことが圧倒的に多い。そのため、その国、その地域に住んでいるからという理由ですでに自分が持っている少ない情報でイメージを築き上げてしまいがちであった。当然、自分自身でもこれまで偏見を持たない意識をしてきたつもりであっても、改めてこの肯定的に出会うという視点に立ち返ることで国や地域が違って共感が生まれやすいことに気がついた。

これまでにアフリカの国を訪れたことがない自分にとってはやはり知らないことが多かっただけに、今回のフィールドワークにおいては特にセネガル、ルワンダのアフリカ地域においてこの視点が生きた。日本や自分がこれまでに訪れてきた国との比較する中で、一種のカルチャーショックを感じながらも、そのカルチャーショックを肯定的に捉えることができた。また、この視点は人と人を深くつなげるために重要な最初のステップであると感じた。この視点がなければこの後の柱3へのつながる理解がとても浅くなって、課題だけが印象に残り、さらなる偏見を生み出す結果になった可能性もあった。



● 伊藤聡子

日本にいながら、8か国の世界の国々、その国に関わる人々とのたくさんの出会いがあった。その中で特に印象的だったのは、NPO法人DIFARが開催している「森の音楽祭」。豊かな自然の中で、さまざまな国の料理や音楽を通して、国籍や年齢を越えて交流することができる素敵な場所。ここでは、さまざまな国の文化を体験するとともに、その国の人々が自分たちの文化を大切にしていること、今後も守り続けていきたい大切な文化であることを五感で感じる事ができた。この「森の音楽祭」のように、まずは、自分の国のことを知ってもらうこと、そして、相手の国のことを知ることが肯定的な出会いにつながると思った。国際協力に携わっている方からは、「活動をする上で文化交流は大切である」という話も聞いた。それぞれの国の文化を受け入れて、互いに尊重することが、誰もが暮らしやすい社会になる第一歩を踏み出すことができるのではないかなと思う。

● 伊藤知世

フィールドワークでは、オンラインではあったが現地の子もたちと交流し、様子を知ることができた。そのときのキラキラした目で話をしたりカメラに手を振ったりする子どもたちの表情が忘れられない。ベトナムの子どもたちとの交流では、一生懸命に日本語を学ぼうとする姿から、「今、勉強していることが将来役に立つと実感すること」で学ぶ意欲が湧いてくるのだと強く感じた。

また、ボリビアの小学生が環境について学習している場面では、一人ひとりが自分の意見をしっかりと持っていて、先生やこちらからの問いかけにはっきりと答えている姿も印象的だった。自分たちの生活に関する内容であったとは言え、これだけ自分のこととして考えられる子どもたちに驚いた。

フィールドワークを通して世界の子もたちの素敵な姿に出会うことができたし、この笑顔を絶やしてはい

けないとも思った。さらに、日本の子どもたちにだって好奇心や意欲があるのだから、その子どもたちと世界のことを一緒に勉強していききたいという決意をした。

● 菊地純奈

「世界（訪問国・その国の人々）と肯定的に出会う」とは、具体的に4つのねらいがあることを事前研修で学んだ。「③自分たちの当たり前が世界の当たり前ではないことに気付く。」では、ボリビアの学校システムを紹介したら面白そうだ。1つの校舎を3つの学校が時間別にシェアしているという事実は中々衝撃的だった。日本では中学校、高校、大学では夜間学校が一部あると思うが、小学校をそのように使っているところは珍しいと思うので、これは児童にとって興味を引く部分ではないかと思う。また、それによって授業時間が短いのも、児童にとっては魅力的だろう。

個人的には、「④自分の中のステレオタイプ/思いこみに気付く。」ということも、とても大切だと感じているので、授業の最初に「〇〇国・地域について知っていることはありますか。」「〇〇国・地域についてどんなイメージがありますか。」と子どもたちに聞き、授業後の変容を見るのも一つの方法だと考える。

● 高口涼

特に「③自分たちの当たり前が世界の当たり前ではないことに気付く。」を大切にしていきたい。国が違えば、場所、気候、民俗・習俗、文化、学校の様子、その国が今困っていることが違う。大人にとっては当たり前のことを一つ一つ目の前にある事実と自分の世界とを比べられるように、しかも子どもの発達段階に応じて、かつ現在の教育課程の中にある枠組みの中で何ができるかを考えていくことが単発な授業にならない方法で、さらに学習した子どもたちが興味や関心をもち続けられると考える。今回、実践を構想していく小学2年生には、世界の国について調べるという学習よりも「紹介しながら比べてみる」、「自分の国と違うところ、同じところを探してみる」、といった方法が教師も子どもも取り組みやすいのではないかと考えている。

● 児玉やこ

知ったり関わったりすると、その国が身近になる。現地で活動するJICAやNGOの方は、その国のことを好きになる。その方から話を聞くと自分もその国に興味をわき、親近感を覚える。子どもたちも同じで、私たち教師が好きな国や行ったことがある国の話を聞くと、「先生の（好きな）国」とその国がインプットされ、身近に感じ、その国が気になり始める。そういう生徒と世界の架け橋になりたい。

オンラインで出会った子どもたちは、どこの子どももとてもかわいい。笑っているだけで癒される。勉強に前向きな子どもたちやコンポスの取組のすばらしさを理解している子どもたちが印象的だった。ベトナムからの留学生と話したとき、ベトナムと日本の似ているところを尋ねた。私はアジアで食も似ていることから、多くの同一性が挙がると思ったが、文化やさまざまな感覚が全然違うとのこと。それでも、その違いや驚きを楽しんでいるようだった。文化や生活の違いを楽しめる感性を生徒に身に付けさせたい。

● 澤田直美

JICA 海外協力隊員の方や、NPO 法人の方との意見交換の機会を通して、多くの人に共通していたのは、その国への愛が大きいということだった。あまり馴染みのない、正直どこにあるのかも分からない国もあったが、その国の良さや日本との違い、活動の内容を聞いているうちに、すっかり「私もその国に行ってみよう！」という気持ちになっていた。まさに、肯定的に出会うという経験をさせてもらったと思う。

世界と肯定的に出会うには、まずシンプルに「知る」ということが大切だと感じた。少しでもその国について知ると、興味がわき、関わりを持ってみたいという気持ちになる。特に途上国については知らないことが多く、マイナスのイメージが浮かんでしまう。しかし、むしろ途上国には知らないことが多いからこそそのおもしろさがあり、発見があると感じた。生徒にとっても知らないことを知ることは刺激になり、様々な問題について考えるきっかけになると実感したため、今後の授業づくり等に活かしていきたい。

● 地頭綾香

自分の当たり前を世界の当たり前だと思わずに、現地のことをまずはしっかりと知ること、現地の方と直接コミュニケーションを取ることが大切だと思った。DIFAR 主催の森の音楽祭で出会ったケニア出身の女性と話

をした際に、「アフリカ=貧困」というイメージを日本人が強く持っていることが残念であるということを知った。アフリカには課題だけではなく、たくさん魅力があることを知って欲しい、だからこそ彼女は、自分がまずは周りの日本人や出会った人に本当のアフリカについて話していきたいと語っていた。彼女との出会いを通して、マスコミなどが伝えるステレオタイプなイメージに流されず、しっかりと「人」と「人」と向き合うことが世界と肯定的に出会う第一歩なのだということが分かった。そうすることで、今まで自分とは関わりがないと思っていた国が、自分にとって大切な人のいる国にかわっていくと思った。

● 諏訪部景子

具体的な狙いが4つあり、その中でも「訪問国を身近に」「異なるやり方、考え方、文化をオモシロイ！それもアリ！と思えること」「思い込みに気付く」というキーワードが気になった。各国の親善大使観光大使になったつもりで冊子に目を通して相手の国について知るという活動では、自然と「この国の素敵な部分や面白いところを紹介したい」という気持ちになり、肯定的な見方で日本と違っている部分を見つけることができた。その国が抱える課題から知識を広げていくスタートもあるが、肯定的に出会った方がその後の「どうしたらいいのか、どんな方法が必要か」の考え方がより自分事としての気持ちを持った考えに発展させられると感じた。

食や家、学校、日常的にやっていることなど、生活に身近な話題から掘り進めていくことで、その国の人達が大切にしている思いや願いをより深く知ることができると感じた。

● 森谷朋香

事前研修では、1つの国の観光大使になりきってその国の歴史や文化、特産などを紹介する活動をする中で、世界と肯定的に出会うための教材作りのポイントを学んだ。その国に関心をもち身近に感じさせたり、自分の当たり前が当たり前でないことに気付かせたりすることがねらいである、そのために、地図や写真などの視覚に訴えるものや、クイズや物語などの興味を引くものを効果的に使うとよいことが分かった。様々な文化や考え方に触れて視野を広げたり、違いを受け入れてそれを面白いと思えるような工夫をしたりすることが大切であると思った。

● 山本実穂

私は本研修を通して、世界と肯定的に出会うためには、笑顔をクローズアップすることが大切であると感じた。今回のフィールドワークで出会った国の中には、辛く深刻な実態も確かに存在する。でも、どの国もそれだけではない。例えば、アイキャンの訪問で出会ったフィリピンの子どもたちは、ストリートチルドレンだった過去をもっており、路上での辛い経験や親と暮らせない現状が心の傷になっていることは間違いない。しかし、彼らの今の暮らしの中では楽しいこともたくさんあるようで、誕生日の思い出を嬉しそうに話したり、校庭で見つけた大切なものについて話したりする時の表情は、子どもらしい無邪気な笑顔だった。インターネットなどで発展途上国を調べると、そういった笑顔の部分よりも、支援を要する実態に関する情報の方が先に出てくることが多いように感じる。そこにある笑顔と彼らの心の豊かさにもっと目を向けて、クローズアップすることで、他の国の人々と肯定的に出会うことができると思う。

● 遠山桂吾

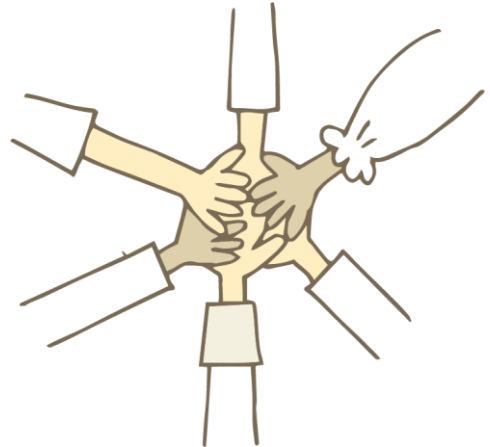
現地の人たちは明るく丁寧に接してくれるという印象を持った。子どもに質問するとみんなそれぞれに目標を持っていてすばらしいと思った。そして、そのために努力する姿もすばらしいと感じた。ぜひ、目標を叶えて欲しいと応援する気持ちになった。途上国の人が普段どんなことをしているか、どんなことを考えながら生活しているかといったところまで想像が及んでいなかったのが、実際に顔を見て話を聞くと親近感が沸きより身近に感じる事ができた。実際に会ったり、話をしたり、その国に行ったりすることが肯定的に出会うということに繋がると感じた。子どもたちが交流すれば、お互いが交流した国の出来事は他人事ではなくなる。これは、国際協力の第一歩ではないかと考えた。フィールドワークでいただいた機会を生かして、教材を考えていたり、授業や研修を行ったりしていきたい。

3. 柱2「日本と世界の同一性に気づき、つながりを理解する」観点から学んだこと

● 伊藤彰

まず、DIFAR 主催の三重県で開催された「森の音楽祭」に参加して、どこの国にも共通する自然、音楽、食を通して諸外国の日常に触れることができた。ボリビアで始まった活動がボリビアだけにとどまらず、ボリビアと地域（日本）を様々な人種・国籍・年齢を超えた人たちでつなぎ、地域振興にも目を向けた参加型の異文化理解としては来場者に多くの気づきとつながりをもたらしたと感じた。

次に、JICA 協力隊の方々のお話を聞く中で、多くの方に共通していた考え方として、「自分たちのやり方を押しつせず、現地の人たちに寄り添った支援を考え、相手を尊重すること」があった。日本と現地を比較することはあっても、決して批判せず、課題は課題として冷静に捉えているところにプロの意識を感じた。その中で連携には現地の方と日頃のコミュニケーションがとても大事であるとわかった。さらに思いを形にする協力隊の方の、受け身ではなく積極的に行動して状況を変えていく意志の強さに感銘を受けた。



● 伊藤聡子

NPO 法人アジア車いす交流センターからの支援で学校に通うことができるようになったインドネシアのカリンさんが「勇気をもっているいるところへ出かけられるのが嬉しい」と語った時の笑顔。NPO 法人アイキャン「子どもの家」で生活しているフィリピンの子どもたちが、一番楽しいことや自分の大切なものを語った時の笑顔。NPO 法人学び舎つばさで日本語を学んでいるベトナムの子どもたちが、日本の好きなおとこや将来の夢を語った時の笑顔。子どもたちの笑顔は万国共通だと感じた。また、日本式教育を取り入れているエジプトの学校では、日直などの責任のある活動を取り入れることで「学校に行くことが楽しい」と思える子どもたちが増えたということだった。子どもたちが自己有用感を味わうことのできる活動は「楽しい」につながることも万国共通。世界中の子どもたちの笑顔を絶やすことのないよう、ひとりの大人として、ひとりの教育者として、自分にできることに取り組んでいきたい。

● 伊藤知世

NPO 法人アイキャンでのフィールドワークでは、フィリピンにある「子どもの家」とオンラインでつないだ。その中で、子どもたちにインタビューをする時間があり、大切なものを紹介してくれたことが印象に残っている。様々な事情を抱えて「子どもの家」で生活をしている子どもたちだが、みんなそれぞれに大切なものがあったり、楽しいことがあったり、できるようになった喜びを感じたり、面倒だと感じることもあったり…。日本の子どもたちと変わらないなと思う場面がたくさんあった。その一方で、日本では当たり前なことが特別に感じたりすることもあるんだなとも思った。

このことから、わたしはぜひひくらすの子どもたちと海外の子どもたちとをオンラインでつなぎ、「自分の宝物紹介」をしたいと考えた。子どもたちがそれぞれどんなものを紹介するのか、そしてそこから何を感じ取るのか、2学期の実践が楽しみである。

● 菊地純奈

どの国にも日本や自分たちの生活との共通点・同一性やつながりがあるので、そこに目を向けられるような授業展開を心掛けたい。具体的なねらい「◎人、ものなどを通し、日本と訪問国がつながっていることに気付く。」では、例えば JICA エジプトの訪問で聞いた、日本式教育が行われていることを取り上げることができる。掃除や学級会、日直などの活動がエジプトでも取り入れられていることは、日本の子どもたちも知らないだろう。日本から遠く離れた地で、自分たちと同じような学校生活を送っている子どもたちがいることに親しみを覚える児童も多いと思う。

また、「⑧海外で頑張る日本人の想いや活動内容から、生き方・働き方について考える。」では、様々な国で働かれている方々、国内で活動をされている方々から話を聞いた。それを元に授業を行うことで、この先、色々な進路・生き方があることを、子どもたちが知る一つの方法にしてもらえたらと思う。

● 高口涼

「ゆるくつながる」「ゆるく気付く」視点を大切にしていきたい。学ぶ前は普段気にも留めなかったことが、スーパーマーケットに行ったら、売られている食品の産地に目を向けたり、ニュースで耳にした国を地図で調べてみたりするといった興味や関心をもち続けられることを授業では考えていきたい。「その時、その授業はよかった」では、つながりを理解するには今一歩なのではないかと考える。繰り返したいところだが学校現場の事情がなかなか都合をつけにくい現状もあることを踏まえると、目的を具体的に、発達段階に応じた指導を考えていくことが大切であると考え。海外に目を向け、関心をもち続ける子どもを育てていきたいと考える。そのための手がかりとして、今回のフィールドワークで得られた成果を存分に活用していきたいと考える。

● 児玉やこ

子どもたちが大切であるということ。子どもたちは、学びたいと思っていること。子どもたちのためにがんばろうと思う大人がいること。日本の先生より働いているルワンダの先生の話や、授業改善に向けて努力するラオスの先生の話聞いて、子どもたちを想う気持ちは同じであると思った。

オンラインでも時間を共有すると、同じ地球の上でつながっていることを実感でした。これは、子どもたちにもぜひ味わってほしい。また、自分の生活に欠かせないコーヒーが、遠い国（距離的に）の多くの人の手によって作られていることを知った。どのような背景で作られているのか知ると、いつも以上においしく味わうことができ、幸せな時間をもらっている。食糧や衣服をはじめ、いろいろな日用品を輸入に頼っている日本だが、その生産者の生活や想い、生産工程を知ること、愛着を抱いたり、消費者としての責任について考えたりでき、柱3につながっていくのだと感じた。

● 澤田直美

話す言葉や住んでいる場所が違っただけで、外国に住んでいる人たちは同じ人間だということを改めて感じた。言葉の違いや文化の違いは、とても大きく感じられてしまうものであるが、考えていることや解決したいと思っている課題に共通点があると分かり、お互いから学べることがあると感じた。違いに焦点を当てるのではなく、似ている部分や同じ部分もあると知ること、違いも楽しめるようになり、より暮らしやすい世界や社会を作る基礎を形成することができると感じた。

その上で、言葉は一つの大きな鍵になるだろう。DIFARの森の音楽祭で、ケニア出身の女性と日本語で話す機会があったのだが、言葉が通じるといことに大きな安心感があり、お互いに言いたいことが言えて、聞けるという環境の重要性を感じた。外国の人々と接する機会が日本でも多くなり、これから子どもたちは外国でも活躍することが増えていくと予想される。外国語を身に着けることの大切さを感じると共に、言葉が通じなくても相手を大切に、お互いを知らうとする気持ちを養っていききたいと思った。

● 地頭綾香

フィールドワークを通して、日本と世界の国々の同一した文化などをいつも見つけることが出来た。中でも「学校・教育」という部分に焦点を当てて同一性を考えるだけでも非常に興味深かった。例えば、ルワンダやラオスでは、学校の費用はほとんどかからないものの、制服代や給食代に苦労している家庭があることを知った。これは、日本の相対的貧困の問題とも重なるものだ。また、コロナ禍での学びに対して、各国が苦戦しつつも、生徒達の学びをとめないために創意工夫をしていたことも共通点だといえる。その他にもICT化に向けた取り組みなどは、各国の学校現場の課題の1つだということも分かった。「教育」のアプローチの仕方次第で、世界の子どもの学びの姿勢は変わり、同時に未来も変わると思った。どこの国の教育方針が良いという優劣をつけるのではなく、課題を解決する手段を他国の事例を通して学び、また良い点は学び合うという姿勢を持つことで、持続可能な社会へと繋がっていくことを確信した。

● 諏訪部景子

柱2にも気になったキーワードがいくつかある。「感情・希望」「人、ものを通じたつながり」「恩恵」「頑張っている人の想い」「生き方・働き方」である。日本でも他の国でも希望を持って、自分達の生活をより良くしていきたいという思いは同じであると思う。身近にある食べ物、何気なく手にとっている文房具など、どこからきているのか、どんな人が、どんな想いで作っているのかなど、想いを馳せてみるのも面白いと感じた。普段何気なく過ごしていると、通過してしまいがちな観点であるが、私たちは、毎日色々なもの・人に助けられて生きているということを再認識したいと思った。また直接は顔の見えないつながりでも、その人の生活・生き方・働き方を想像することで、「今の自分にできることはどんなことだろうか」と積極的に考えてみたくなる。つながり、巡り自分のところにも返ってくる課題が見つければ、アクションを起こしたいと思えるようになるのではないかと感じた。

● 森谷朋香

ベトナム、フィリピン、ボリビアの学校や施設の子どもたちの様子を見た。どの国の子どもたちも元気な様子で、宝物や将来の夢を語ったり、学校で取り組んでいる環境を守る取り組みを紹介したりしていた。今を懸命に生きる姿や未来に希望をもつ子どもたちの姿は、国が違って変わらないものがあると思った。また、日本語や日本文化を学んでいる子どもたちは、日本について興味をもっており、「もっと知りたい」「日本に行ってみよう」という声もあったので嬉しく感じた。他国の文化を知ることは、様々な価値観を知り視野を広げたり、自国の文化の良さに改めて気付くきっかけになったりするので、実践で様々な国の文化を学ぶ活動をしたかった。

● 山本実穂

WAFCA でのオンライン学校訪問で聞いた、ブカシ県特別支援学校・カリンさんの「支援を受けて勇気ももらった。いろんなところに行けて嬉しい。もっといろんなところに行きたい。」という言葉が印象に残っている。体に合った車椅子があることで、生活が変わり、学習ができるようになり、夢をもつことができる。それが全てではないが、車椅子があるかないかで、人1人の人生が変わることを知った。WAFCA の支援によって、障がいをもつ子ども1人の人生が豊かになっている。また、WAFCA の熊澤さんが教員から転職し、今は、車椅子支援で関わったインドネシアの子どもたちの成長を見届けることにやりがいを感じながら働いている様子から、世界とつながる生き方で人生を切り拓いている人がいることにも気づいた。そしてもう少し広い視点で見れば、日本は、東日本大地震時にインドネシアから支援物資や義援金の支援を受けた歴史があり、現在でも食糧や資源の面でインドネシアの恩恵を受けている。こうして日本と世界が相互に依存し合って、密接に結びついていることを具体的に学ぶことができた。

● 遠山桂吾

どの国も日本との同一性はあると感じた。WAFCA では、車いすを得ることによって人生の可能性が広がるということが分かった。それは日本もフィリピンも同じであり、国際協力とは人の可能性を広げることができると感じた。エジプトが日本式教育を導入した要因の1つは、エジプト大統領が日本の学校に社会のあるべき姿を見たからであろうという話があった。誰もが暮らしやすい社会は国が違って共通する部分があると感じた。ルワンダは、ICTに力を入れていると話をついた。日本もギガスクール構想を打ち出してICT教育推進に力を入れている。ICTを重要性は多くの国が理解していると思った。ラオスの教育支援では、日本の教科書会社が参入しラオスの算数の教科書を作っていた。ラオスで以前使用されていた文字ばかりの教科書より見やすく、子どもがやってみようという気になるということが分かった。普段当たり前に使っていったが、日本の教科書の工夫やすごさが分かった。授業も日本の参加型の形式を取り入れていた。子どもにとっても分かりやすく楽しいものになっていると分かった。見やすい、意欲的に学べるといった工夫は共通だと感じた。

4. 柱3「世界の課題を知り、解決に向けて共に越える」観点から学んだこと

● 伊藤彰

「全ての支援は自立心を奪ってしまう」とコーヒー生産地と協働する会の代表である古賀さんが言われたように、今回オンラインでそしてフィールドワークで訪問させていただいた多くの方が同様のことを言われたのが印象的だった。また ICAN の理念でもある「Not for ~, But with ~」に象徴されるように、支援してあげるではなく、共に歩んでいくという視点が必要だと感じた。その具体的な事例として NPO 法人アジア車いす交流センター (WAFCA) では日本のスタッフが行うこと、そして現地のスタッフにやってもらうことの役割を明確にし、一方的な支援ではなく、自立に向けた支援を協働することを実現していた。今回、各国が抱えている課題は突き詰めればその国特有の課題ではなく、日本も同様な課題を抱えているケースがある。だからこそ、支援はしてあげるものではなく、共に考え、共に越えていくという視点を持ち続けることが、現地の文化や習慣、現地の人の思いを深く受け止めることにつながると感じた。



● 伊藤聡子

「相手の立場に立って活動を行うこと」「現地の人たちだけで活動が続けられるようなシステム作りをしていくこと」これらの言葉は、国際協力に携わっている方々から聞いた言葉である。特に印象に残っているのは、NPO 法人 DIFAR の瀧本里子さんから聞いた「DIFAR は持続可能な社会を作るための伴走者」という言葉。支援をするだけではなく、現地の人や行政にも参加をしてもらうなど、多くの人を巻き込むことが課題を解決していくためには大切であることを学んだ。また、「生活の変化に立ち会い、見守ることも DIFAR の役割」という話を聞き、生活が変化することに対する不安にも寄り添い、その後も見守り続けることが「解決に向けて共に越える」ということにつながると思った。一つしかない地球を守り続けていくためには、先進国だから途上国だからではなく、世界中の人々が課題解決に向けて手を取り合い、「共に」考え、行動していくことが何よりも大切である。

● 伊藤知世

世界の子どもたちと交流すると、「笑顔が素敵だな」といつも思う。わたしも途上国で生活した経験があるが、子どもたちの笑顔や近所の人たちの優しさに毎日のように触れ、「豊かさ」とは何だろうか、といつも疑問に思ってきた。こんなに素敵な笑顔で過ごしているのだから、このままで良いのではないだろうか、支援なんて必要ないのではないだろうか、と思ったこともある。本研修でも現地の子どもたちの素敵な笑顔が印象に残っている。しかし、研修を通してその国の実態などを知っていくと、「みんなちがってみんないい」ではないということもあるのだとやはり思う。いろいろと考えるけれど、生まれた国が違うだけでこんなにも生活に差があり、命の危険にさらされる確率が高くていいのか、という思いに行きついた。それも、それぞれの国と肯定的な出会いがあったからこそ生まれる感情なのだと感じる。

● 菊地純奈

私が、柱3の具体的なねらいの中で、特に重きを置きたいのは「⑬日本の課題についても振り返り、世界や日本の課題解決のために自分にできることを考える。」である。人権や環境など、どの国にも解決や改善が必要な問題があることに気づき、自分たちに何ができるのか考える・行動するところまでを目標としたい。

これは昨年度の自分の実践反省になってしまうのだが、行動目標を決めたり宣言をしたりするときに、実現可能なものかどうかをもう一度見直させること、またそれに対しての振り返りをきちんと行うことが欠けていたので、本年度はそこにも気を配りたい。それは、今回の訪問先でお話を聞いた多くの方々がおっしゃっていた「現地の方法に合わせること」「自分のやりたいを押しつけない」にも繋がる部分があるように感じる。自分

の生活に合った無理のない方法で行動目標を立てること、特に児童の場合は、自分の生活に、保護者や家族の意向も大きく関わることから、家族の意見も尊重した上でできることに取り組むことができれば良いと思う。授業がきっかけで、児童の家族の中で身近な問題改善・解決に向けての話題が出たり、それについて考えてくれたりしたら素敵だと思う。

● 高口涼

「現地の方法に合わせること」「自分のやりたいを押しつけない」は、この夏一番聞いたセリフである。職業柄自分自身反省した。良かれと思って掛けた声掛けは本当に必要だったのか。助けを求めているけれど、本当にその場で手を貸すことが支援になるのか。「つい、教えてしまう」「つい、失敗してしまうかもしれないと先に用意してしまう」ことが多くなかったか。自分の考えを押し通そうとする部分は多くなかっただろうか。子どもに権利を主張することの大切さと貴さをきちんと伝えてきたか、隠してはこなかっただろうか。

世界の課題を知り、解決に向けてともに超えていく視点は、考えを主張できること、権利を主張できる環境をつくることから始まる。これは遠い世界のことでなく、身近な生活から実践できるのではないかと考える。身近なことから世界に目を開けるようになると良いと考える。

● 児玉やこ

SDGs があらゆるところで広がりはじめたが、子どもたちにとって世界の課題が他人事であるような雰囲気がかかっていた。今回の研修に参加し、「共に」解決へ向かうには、柱1「肯定的に出会うこと」と柱2「同一性やつながりを理解すること」が不可欠だと感じた。今回お話を聞いた全員が「そこで暮らす人たちの話に耳を傾け、課題解決のために一緒に考え、一緒に取り組む」「支援がなくなっても現地の人たちで続けていける持続可能なシステムづくりを目指す」という共通の信念をもっていた。現地の人々の想いを知らないと、押し付けになり自己満足で終わってしまう。そもそも、その国や人が好きだから、一緒に何とかしたいと思えるのだ。

子どもたちと課題解決について考えるときに、どこかの国のだれかの課題ではなく、同じ地球に住む地球市民の仲間と一緒に課題を乗り越えるイメージをもたせたい。そして、さまざまな「格差」があることは、どの国にも当てはまると感じた。また、先進国とよばれる日本が開発途上国に見習うべきところが多くあると分かった。

● 澤田直美

「現地の人たちの話を聞き、ニーズを理解する」「現地の人だけで自立した活動ができるようにする」—この2点をどの団体も、どの協力隊員も大切にしていることが今回の研修で強く印象に残った。こちらの考えを押し付けるのではなく、共に考え、それぞれの国の人の性格や状況に合う方法を探っていくことが、持続可能な解決方法につながっていくのだと知った。

世界が抱える課題解決には、正解があるわけではないし、時間がかかることも多い。答えのない課題に向き合う中には不安や悩みが必ずあるだろう。しかし、それでもより良い答えに近づこうと行動を続けていくことで、人々は前向きに変化していたし、話を聞いている私自身でさえ前向きな気持ちにさせてもらったように思う。外国だけでなく、日本においても「自立」「持続可能」「お互いを理解しようとする気持ち」は課題解決には重要なキーワードであり、今後の学校生活や授業においても考える機会を作っていきたい。

● 地頭綾香

貧困のサイクルから抜け出せないと「人権」は守られないということを研修を通して、改めて考えた。そのためにも、「教育」は大きな助けになるものだと思った。教育が行われることで、子ども達の未来は確実に変わる。特に、アイキャンで出会った子ども達とDIFARで出会った子どもたちがそう確信させてくれた。アイキャンの運営する「子どもの家」には路上生活を経験した子ども達が集っている。そして、子どもの家を卒業した子ども達は、路上の子ども達に勉強を教える活動に参加をしている。こういったロールモデルが身近にいることは非常に大切だといえる。また、DIFARの事業を通して、環境教育を受けた子供たちは、コンポストを実際に自分たちで運営することで、「環境」への意識変化があったと言っていた。こうした次世代への教育をしっかりと行っていくことで、課題は少しずつ解決するといえる。私自身も「教育」に携わるものとして、世界の課題解決に向けて今後も尽力していきたい。

● 諏訪部景子

実際にフィールドワークやインタビューの中で「相手の考え（誇り）を大切に、それに見合う方法を提案する」「悪循環を断ち切る具体的な一手を導入する」「話し合っただけでも改善を重ねる」「互いのいいところを活かし学び合う」「目的・課題の現状・原因をしっかりと見極める」ということが大切であると学んだ。JICA 事務局や協力隊の活動から学んだことは、「13 日本の課題についてもふりかえり、世界や日本の課題解決のために自分にできることを考える」にもつながると感じている。人権や環境課題など国内でも世界でも解決や改善のために必要なことはある。解決のために、自分たちにできることはどんなことを考え、行動につなげていきたい。「共に」という手を取り合っただけでアクションを起こそうというエネルギーを共有することも私たちの役目であると感じた。

● 森谷朋香

国際協力の活動をしている方たちに、支援をするときに大切にしていることを聞くと、「現地の方の考え方や習慣を尊重すること」「持続可能な支援すること」という答えが多くあった。「現地の方の考え方や習慣を尊重する」とは、現地の習慣や文化を学んだり、広い視野をもって共感的に接したりすることあり、「持続可能な支援すること」とは、支援の方法を現地の人と相談して決めたり、一緒に活動を行ったりすることで支援がなくなっても現地の人たちだけで活動を行っていくことができるようにすることであると学んだ。このような考え方を、多くの人に伝えていきたい。また、私自身が教育活動をする上でも大切にしていきたい。

● 山本実穂

コーヒー生産地と協働する会のダマセンさんは、私たちとのオンライン交流のために、現地の多くの農家さんの生の声を集めてくれた。老若男女様々な人の話をたくさん聞くと、それぞれの立場から見た課題が分かり、本当のニーズが見えてくる。共に課題解決をする上で、「こんな支援をしたい」という思いや情熱ももちろん大切だが、それ以上に現地の方の声にとことん耳を傾け、ニーズの中心を捉えることが大切であると感じた。また、ルワンダの協力隊として活動する竹本さんの「ニーズを聞くには外部の人ではいけないから、町に溶け込み現地人になることが2年間の目標」という言葉も印象に残っている。やはり、直接課題解決に向かうには、現地へ行き、そこで人間関係を構築して初めてできることも多くある。ただ、日本で教員として働く私たちには、私たちだからこそできることがあると考える。現地の声（課題）を、次の世代を担う子どもたちに伝え、解決に向けて共に考える方法を身につけさせることだ。それが、将来の課題を解決することにもつながると思う。

● 遠山桂吾

協力隊の方々が大切にしていることの共通点は、現地の方の話をよく聞き、共に取り組む。上から教えてあげるのではなく、同じ目線に立つという姿勢であった。支援をしている団体は、現地の人にとって必要とするのではなく、いずれ日本の支援者がいなくなっても現地の人たちだけでやっていけるようにすることを目標に支援を行っていた。共に活動することを大切にしていた。

日本人から見てこちらの方がよいと思うことでも、現地の方は違った見方をしていることがある。どちらが良いとか悪いではなく、両面を見てメリットとデメリットを考え、合意を得たうえで物事を進めていくことが大切であると学んだ。これは、日本国内や教職員間、学級でも同じであると思った。解決に向けて共に超えるためには、お互いを理解することが必要だと感じた。

5. その他全般を通じての感想・意見など

● 伊藤彰

今回は現地の学校や子どもたちとつながる機会が多かった。どの子どもたちも生き生きとした表情で学ぶ意欲がとても強かった。また、学ぶことが将来の夢を実現させる大事な要因であることを理解し、子どもたち一人ひとりがしっかりと夢を持っていることが印象的だった。やはり国の発展には子どもの命の安全確保や居場所づくり、そして教育の基盤をしっかりと地道に築き上げていくことが不可欠であると感じた。

また、全体を通して専門家や協力隊の話に度々出てきた「支援」という言葉の奥深さについても考えさせられた。一方的な支援や考えの押し付けは機能せず、まずは相手を知り現地の伝統や文化を尊重し、共に作り上げていく支援こそが持続可能な支援につながっていくと感じた。コーヒー生産地と協働する会の活動のように次世代につなげる土壌開発の支援、そして DIFAR のエコサントイレ、コンポスト支援はまさにその代表例であった。

● 伊藤聡子

8か国のさまざまな国際協力団体とつながりながら、多様な視点から学ぶことができた。国内にいながらこんなに学びの多い研修ができるなんて思いもしなかった。この研修での学びを子どもたちや周りの先生方に還元できるように、より一層国際理解教育に力を入れていきたいと思う。

● 伊藤知世

コロナ禍で海外にはなかなか行けない中、このように国内で世界のいろいろな国とつながれたことで、とても有意義な研修になった。直接インタビューをしたり交流したりすることができ、みんなが熱い思いをもって活動されていることが実感できた。その中でも、実際の現場に行けた「森の音楽祭」では、その空間に入り込むことができたので、そこに関わる全ての人の熱気を全身で感じ取ることができた。あの場にいると、いろいろな興味や疑問もわいてくるし、なにより楽しい気持ちになった。直接対面で人と人が関わることの大切さを再認識したように思う。このようなことから、国内研修であっても実際の現場に行くことのできるプログラムがあるといいなと感じた。

● 菊地純奈

今回の研修は、毎回の内容が非常に濃かったため、どの研修も印象に残っている言葉や出来事がある。例えば、①NPO 法人アジア車いす交流センター (WAFCA) では、「それぞれの体型に合わせた車いすを作っている」ということ、よく考えれば、当たり前なことだと思うが、車いすに触れる機会が少なかったり、身近に車いすに乗っている人がいなかったりすると、そのことについて考える機会もないと思う。実際に私も初めて知ったことであった。車いすドクターの方が「生活に欠かせないものだからこそ、車いすを使う人が安心して気持ち良く社会参加ができるように。」と話されていたことも印象に残っている。

また、⑧-2 NPO 法人 DIFAR では、コンポストの活動について堂々と話をする子どもたちの姿、その一方でポイ捨てをしてしまう習慣がある事実が印象的だった。これは、日本でも共通するところがあるなと思いを聞いていた。道徳の授業で「友達に悪口を言ったり、手を出したりするのはよくない」と学んでも、なかなか行動に移すことが難しい子どももいる。

授業をしていく中でも、「知っている→行動する」につながるようなきっかけや働きかけを考えていくことが大切だと感じた。

● 高口涼

時差を感じる研修だった。久しぶりに徹夜をして復習したり資料を読み返したり、各国の事情について背景



を調べたりした。また、最近のニュースで取り上げられていることを取り出してみたり、JICA で派遣された知人に話を聞いたりした。実際に会えることがどれほど貴重かを、オンライン会話を通じて体験するとともに、オンラインの国境のなさ、便利さも同時に体験した。多くの方への感謝とともに、子どもたちの学びに還元していきたいと思う。

● 児玉やこ

授業改善の活動を行っている協力隊の方に、現地の先生が子どもたちのために一緒に授業改善のために努力してくれるので、現地の先生方に「敬意をはらって」活動を進めていると聞いた。他の JICA 関係の方も、NGO / NPO の方も、言葉は違うが、現地の人に「敬意を払い」、その人の生活や文化を尊重しているように感じた。相手に敬意をはらう姿勢は、普段の私たちにも必要なものであると感じた。教えているようで教えられることがいっぱい目の前の子どもたち、保護者、同僚など、どの人に対しても分け隔てなく敬意をはらえる人になりたいと思った。上辺だけの国際理解教育だと、「開発途上国の人ばかりかわいそう」で終わってしまう。そこで生きる子どもも大人も、1人の人として尊重されるべき存在であること、敬意をはらう相手であることを感じとれるように授業を進めたい。

今年の夏は、コロナ禍なのに8か国も訪れることができた。訪問先の素敵な人たちと一緒に学んだ仲間、学びを支えてくれた皆さんと共に、貴重な経験ができたことに感謝している。

● 澤田直美

今回の研修を通して、あまり馴染みのなかった国の人々や、その国に関わっている団体や協力隊員、専門家の方々から話を聞き、世界に住んでいる人たちは知れば知るほど同じ人間だと感じるようになり、日本と世界はつながっていて切り離せないということに気付いた。

多くの取り組みを見る中で、「安心」「持続可能」「希望・夢」という言葉をこれから自分の中で大切にしたいと考えるようになった。まずは、「安心」できる環境が整っていることが必要だ。住む場所があり、食べるものがあり、信頼できる人が近くにいるという安心感は、世界の一人一人が持っていたい環境である。そして、「持続可能」な活動を自分たちで続けていくことが、自信につながると分かった。持続可能な活動には、技術や人材育成が必要である。今回関わりのあった団体は、この2つを大切にしていたように思う。そして、これらの環境が整い、活動を続けていくと、人は「希望・夢」を持てるようになる。世界の課題を考えると同時に、まずは自分が暮らす日本での生活や子どもたちとの関わりを見直し、行動を起こしていきたいと思う。

● 地頭綾香

コロナ禍であっても、世界を身近に感じ、たくさんの引き出しを得ることが出来た研修であった。ここで得たことを未来の担い手である子ども達に参加型プログラムとして還元していくこと、そして今後も国際理解教育を続けていくために、本校の先生方や他校の先生方と共に学びの共有をしていくことが私自身の役割の1つだといえる。また、今回のフィールドワークで出会った方々とのネットワークを今後も大事にし、生徒達が海外との接点を持つプラットフォームを少しずつ構築していく仕組みづくりをしていきたい。

SDGs の課題及び国際理解へと繋がる題材は身近なところにある。よって、年代・世代・国籍を超えて学び合える題材となるといえる。この題材を切り口としながら、未来への小さな種まきをしていくことでどんな変化が生徒達・隣人・社会、そして自分自身に出るのか、期待に胸を膨らませている。

● 諏訪部景子

どのフィールドワークもとても中身の濃い内容で、日本の現状と比べてハッとさせられることがたくさんあった。その中でも、特に印象に残っているのは以下のことである。

① WAFCA より

アジアの障がい者の社会参画の実現に向けて、ハード面（社会・学校へのアクセス）を支援するという、技術提供の支援方法があること。ただ技術や物資を提供するだけでなく、目の前の人に合わせた「調整・調節」のプロセスが重要であること。

支援を受けたカリンさんが「外に出ていく勇気を得られた」と話していた姿も印象的だった。また、「障がいは人の見方（社会）が作るものである」という言葉にも考えさせられた。時間がかかる課題かもしれないが、

マインドセットを解いていくこと・無意識の中で作られてしまっているステレオタイプに気づくことの必要性も感じた。

③ベトナム留学生交流会より

「なぜあえて日本語を学ぶのか」ということが疑問であったため、留学生と実際に話してみても感じたことが多かった。母国に戻って観光業（仕事）に生かしたい、先生になってたくさんの人に言語を教える村を少しでも豊かにしたい、日本でたくさん働いて家族を喜ばせたり自分の夢を追いたいなど、様々な想いを語ってくれた。中にはテキストで勉強する日本語と実際の使われ方がちがっていて困ったので、バイトの人に質問したという話や日本特有の文化背景（説明しなくても行間を読んで判断する）などの難しさもあると分かった。夢を持って日本に勉強しにきたが、実際の職場で苦労する（安い労働者として買い叩かれる・職場の人と合わない）などの事例が少なくないと知り、日本に残って夢にチャレンジするか母国に戻るかで迷っているという話も聞いた。日本国内で過ごしているとあまり不便さは感じないが、もっと自分の夢を追いたいと努力する人たちへのあたたかさを感じられるコミュニティが必要だと感じた。いろいろな事情で海外から日本に来る人はもちろん、日本から一歩も出た事がないという人にもである。人種を越えて応援しあえるように互いの良さを知るところから始めてみたいと感じた。

⑦アイキャン子どもの家とのリモート交流より

『「～のため」ではなく「～とともに」という視点』を大事にして、活動しているという言葉が何より印象的だった。それぞれがもつ良いところを持ち寄って、一緒に解決していこうという姿勢が安心感を生むのではないかと改めて感じた瞬間でもあった。

様々な理由で路上生活を経験した子どもたちが、屈託のない笑顔で夢や宝物について語ってくれた子どもの家との交流会では涙がこぼれそうになった。施設運営に関わる人が、衣食住のサポートだけでなく、子どもたちを「一人の人間として尊重」してきたことから生まれた笑顔であるとも感じた。生きること、一緒に過ごす人と楽しむ時間、日々の生活の中で嬉しいと感じる心は日本の子どもたちとも共通して話題にできることでもあると思う。活動に協力する方法も多数提示してもらったので、学校単位でも話題にして協力できるのではないかと考えた。

②JICA エジプト・⑨JICA ラオスより

日本の教育システムを部分的に導入して効果を測っている事例はとても興味をもてた。各国の先生の意識の違い、ハード面、授業スタイル、カリキュラム、教室環境や人数の違いなどには驚くことがたくさんあったが、実際の様子をクイズ形式や写真から見る比較などのアクティビティーを通して実践すると、日本の子どもたちも興味をもてるのではないかと感じた。教育へのアクセスが課題の一つでもあったので、「貧困の輪」アクティビティーから派生し、世界中の子どもたちが自分の夢に向かって学べる世の中づくりに大切なことを考えるのも面白いなと考えた。

<国際協力・支援の中で大事にされている思いや考え方>

どの訪問先でも、それぞれに苦労や工夫もあり現状とのギャップに課題を感じることも語られた。活動内容こそ違うものの、共通して大事にされている思いや考え方があった。

- ・何か特別な物をもっていくのではなく、現地にあるもので、現地の人たちだけでも広めたり評価したりできるようにしていくことが本当の支援なのではないか。
- ・相手を知ること、好きになることが、まず支援の第一歩である。
- ・活動に見返りは求めない。ただ、目の前の人の思いや願いを大切にサポートすることが大切である。
- ・自分達で「自立」し、社会やコミュニティを支えたり、作ったりしていけるように、最後は任せることも大切である。
- ・希望や夢を持って頑張ろうとしている人を応援する気持ちで対応すること。
- ・助け過ぎても、現地の人たちの社会的な自立につながらない。自分達でよりよくしていけるよう、やり方をレクチャーするようにしている。

「支援」という言葉は、日本の教育現場でもよく使われる言葉ではあるが、研修を通して出会った人々の言葉から改めて意味を自分の働く姿に問い直したいなと感じた。

人権意識にもつながる部分であるが、「縁あって出会えた目の前の人を大事にするサポートのあり方」をもう一度よく考え直してみたいと思った。

今後の発展のためのフェーズを見据えて現地や国内で前向きに行動している現地スタッフや子どもたちの笑顔・専門家の熱心な姿に、日本の教育現場も負けていけないと奮起させられる場面がたくさんあった。2学期以降、子どもたちと過ごす中で一つでも多く学びを還元できたらと思う。

● 森谷朋香

フィールドワークで様々な人に会い、話を聞いたり様子を見たり体験することができ、貴重な経験となった。自分の知らなかった世界を発見したときは面白いと思った。それぞれの国の魅力を知る一方で課題があり、それを解決するために懸命に活動している人がたくさんいることを知り、自分にもできることとしていきたいと思った。そして、その支援の輪が広がってほしいと思った。そのために、学校での実践を通して、フィールドワークで学んだことや感じたことを子どもや地域に伝えていきたい。

● 山本実穂

今回のフィールドワークでは、毎回印象に残る言葉や体験、新たな学びがあり、大変充実した時間だった。最初は、自分の頭の中でそれぞれの訪問先が「点」としての学びとして残っていたが、回を重ねるごとに共通性に気づいたり、少しずつ一般化されたりして、「線」で繋がっていく感覚があった。今後の授業実践の中で子どもたちにもその感覚をもたせることができたらいいなと思った。例えば、子どもたちにとって「インドネシアのことを勉強した」で終わってしまうのではなく、そこから何を学び、どう活かすのかを大切に授業を考えていきたい。

● 遠山桂吾

WAFCA 訪問では、特別支援学校が地域にあることによって、地域の人々の理解が深まったと聞き、それも学校の役割の1つであると思った。アイキャン訪問で、社会的に弱い立場の子どもが、厳しい状況に置かれていることが分かった。国の豊かさとは、社会的に弱い立場の人がどれだけ充実して過ごせるかという視点もあると学び、とても印象的であった。エジプト訪問では、外から日本の実践を見てみることで、日直や学級会、掃除など普段何気なく行っていることの意味を再確認できた。学校現場に戻ったら、意味や意義を認識しながら活動に取り組もうと思った。



● 中間会合

◇ 以下のとおり「開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム 2023」で行う実践体験ワークショップの内容検討会を行った。

● 実践体験ワークショップの検討会

第1回：2022年11月26（土）13：00～17：00 参加者：6人

第2回：2023年1月21（土）13：00～17：00 参加者：5人

（うち1人は教師国内研修チーム以外のワークショップチームに参加）

内容：「開発教育指導者研修（実践編）報告書」P.31-32 参照



● 事後研修②

◇ 以下のとおり、開発指導者研修（実践編）受講者と共に研修を行った。

● 事後研修②／開発教育指導者研修（実践編）第4回

日時：2023年2月25（土）10：00～18：00

ねらい：仲間の実践の成果と課題から学びあい、開発教育の意義と可能性を確認共有する。各自の実践内容等を一般に向けて発表し、学びの好循環を作る準備を行う。

参加人数：教師国内研修受講者12人

内容：「開発教育指導者研修（実践編）報告書」P.70-73 参照



● 実践報告フォーラムでの報告

<教師国内研修報告>

◇ 以下のとおり、受講者代表3人が発表した。

● 教師国内研修報告

日時：2023年2月26（日）10：15～10：20

内容：教師国内研修で学んだこと

発表者：伊藤彰、伊藤聡子、高口涼



<ポスターセッション(実践報告)>

◇ 実践のねらいとプログラムをまとめた「実践報告ポスター」と実践の教材、成果、写真などをもとに、フォーラム午前中に、受講者全員が14分ずつ（報告9分+質疑応答5分）報告を行った。



<実践体験ワークショップ>

◇ 以下のとおり、受講者の有志が、実践体験ワークショップを行った。

● 実践体験ワークショップ

日時：2023年2月26（日）13：50～15：50

内容：みんなちがってみんないい！～国内研修で出会ったちが～

→詳細は「開発教育指導者研修（実践編）報告書」P.80-81 参照

